402

特214
567

恩田重信著

既成宗教撲滅論（上、中、下篇）

鐵角坊藏版

始

特214
549

既成宗教撲滅論序

思想は知識と共に進退するもので知識が低下すれば思想も亦低下し知識が向上すれば思想も亦向上するデモクリタスの地水火風説も其の當時では持囃されたであらうフロギストン説も其の又當時に於ては持囃されたであらう然し知識の進歩した今日にありては中學の生徒でも最早信用しなくなつた

然るに宗教だけは二千年の昔の教説其の儘で今日に及んでゐる是れは教えを受ける人間の知識が進歩しない結果である

我輩は無理に既成宗教を撲滅するのではない知識の進歩した今日既成宗教は地水火風説やフロギストン説の如く最早人間から忘れられるものとなつたと言ふ意見なのである然も人間が既成の宗教を尚々信用するならば我輩は人知の發達の甚だ遲きを嘆息するのである

今や吾人は世界人類の平和幸福に向つて進まねばならぬ時代であると信ずる從つて言語も世界共通の言語とせんければならぬ國際關係も隣保相助くる樣なことにせんければならぬ・そして障壁なんてものも一切除去し顏色の黃白なんても

ので人間を區別する樣な偏見も取去らねばならず宗教が唯一神教であるとか多神教であるとか・つまらぬことで人間を區別する樣な偏見をも取去らねばならぬ時代となつたと思ふ・此の考ひから見ても既成の宗教は撲滅せんければならぬと思ふてゐる

本書はこんな考ひで書いたものである大方君子の示教を乞ふてやまぬ・之れを序となす

昭和十年十一月二十五日加筆訂正

剛堂逸人　恩田重信識

既成宗教撲滅論目次

上編

〔一〕阿彌陀經解說……一
〔二〕禪宗坊主の問答論……四
〔三〕生長の家と天理教……一〇
〔四〕般若心經の解說……一四
〔五〕碧巖錄の第一則の談話……一七
〔六〕觀音經の解說……二〇
〔七〕眞言宗と陀羅尼の解說……二六
〔八〕御詠歌と巡禮……三三
〔九〕和讃の解說……三八
〔十〕佛教は葬式坊主の道具……四四

中編

〔一〕宗教心の起源……一
〔二〕宗教の用無用に就て……五
〔三〕妄想分別の効果……六
〔四〕宗教の政治に於ける効果……一一
〔五〕道德と宗教……一四
〔六〕宗教は拔苦與樂の藥劑……一七
〔七〕陰府の國主……二三
〔八〕基督教の侵略利用……二七
〔九〕宗教は裝飾か……三〇
〔十〕神の存在の證明……三三
〔十一〕原　罪……三七

下編

〔一〕心は現象なり……一
〔二〕今世後世の夢想觀……五
〔三〕人畜の區別……九
〔四〕遺骸片付方法……一三
〔五〕葬式と祭禮……一八
〔六〕結　論……二二

既成宗教撲滅論（上篇）

剛堂恩田重信著

〔一〕 阿彌陀經解說

棺桶の前や佛壇の前で坊さんが讀誦する經文には法華經（ホケキャウ）もあれば觀音經（カンノンギャウ）もある・色色あるが門徒坊主の讀むお經に阿彌陀經といふものがある・其の宗派で一番大事なお經であり佛敎仲間から最上乘のものだとされてゐるものだが・さて其の內容を檢討して見ると全く愚にもつかぬ事がかいてあるのである・卽ち開卷第一には演說場の光景が叙述されてあり其の次には聽衆の種類が列記され・そして其の次にお釋迦樣が長老舍利弗（シャリホツ）よ・と舍利弗に呼びかけられてお說きなされたとがかいてある・そのお說敎に曰く西方十萬億の佛土を過ぐると・そこに極樂といふ世界があつて・其の極樂國に一人の佛樣が居られる・それが阿彌陀樣と申さるる御方で今も現に說法してゐられるぞ・と申し述べられ・そして其の次ぎからは此の極樂國の樣子を丁寧にお述べに相成りどんな

人でも・其のお話を拜聽するや・そんな好い處なら是非一度往つて見たいものだといふ樣な瞻望心の起りそうな樣子に・面白くお說きなされてあるが・さてそこには別に理窟めきた事は少しも說いてない・眞宗の坊さんに聞けば其の理窟の無い處にお說敎の價値があるのだそうだが兎にかく理窟は全く無い・そしてお經の中程(ナカホド)に至りてお釋迦樣が

舍利弗よ善男子善女人が阿彌陀佛といふ・その稱號だけを聽き取り・その稱號を一心不亂に忘れぬ樣に心がければ・其の信者の死ぬときに阿彌陀樣が多くのお弟子等をお連れなされて信者の前に現はれ給へ・そして其の信者が最後の息(イキ)を引取るとき・其の信者の心は安定不顚となりて阿彌陀佛の極樂國に往生することが出來るのであるから・お前達も此の極樂國に往生する樣發願するがよからうぞ

とお說きなされ・そしてそれから又更に

舍利弗よ・西方の世界には無量無數の佛樣が居られて大きな長い舌をお出しなされて三千大千世界に向はれ・そして誠實にお說敎なされてゐらるるから・お前達も此の不思議な功德(クドク)を稱讃し奉り・そして一切諸佛の護念せられる所の此のお經を信仰(シンギャウ)すべし

とお說き遊ばされ・そして最後に至り・此のお經の作者が

佛(ホトケ)此の經を說き終るや舍利弗はもちろん・其の他の比丘(ビク)比丘尼(ビクニ)を始め世間の天人や阿修羅(アシュラ)の無賴漢や呑助(ノミスケ)等(ラ)までが殘らず絕大な信心を起して・お說敎を有がたく信受し・そして最敬禮して退去したのである

と結んで置いたのでありますが・どうです諸君・阿彌陀經といふものは・こんな意味のものであります・こんな御伽噺(オトギバナシ)の樣なものを讀んで聽かせる坊樣もお目出たいが・それを有難く信受して箸(ハシ)の揚げ卸し・下駄を穿(ハく)とき・湯槽(ユブネ)に浸(ツカ)つてゐるとき・場合によりては夫婦同衾の折に於てまで聲を細く長く伸ばして・南無阿彌陀佛・南無阿彌陀佛と繰返へして唱へ・かくして死ねば・慥かに極樂に往かれ・そして・そこで

白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利(シャリ)鳥・伽羅頻迦(ガラビンギャ)などといふ種々雜多の奇妙奇態の鳥が晝となく夜となく・ハモニカ的な・優雅な美音を以て五根(眼・耳・鼻・舌・身)五力(信・進・念・定・慧)七菩提分(一名七覺支)(擇法覺分・精進覺分・喜覺分・除覺分・捨覺分・定覺分・念覺分)八聖道分(一名八正道)(正見・正語・正思惟・正業・正命・精進・正念・正定)などと稱する倫理道德・修業の心得等を說いて聽かせてゐるのを聽聞することが出來る

と信ずる愚夫愚婦のお目出たさ加減やお氣の毒さ加減が誠に憫然の至りに耐へぬのである

とは言ふものの・こんな事を以て人心を集結し統制して因て以て惡事を防止し善行に導びくための手段方便とすることは必ずしも惡るい事ぢやないが其の信者を利用し緋の衣(コロモ)を着・以て榮譽榮

華な生活を送る坊主は實に憎みても尙餘ありといふべきである

〔二〕禪宗坊主の問答論

禪宗坊主は一切衆生・佛性ありとか・教外別傳・不立文字とか乃至諸行無常・五蘊皆空とか・なんとかかんとか說いて聽かせてゐるが・下手な醫者に自分の病氣のわからぬ如く・なにがなにやら・坊さん夫れ自身には其の義が一向にわかつてゐないのである

禪宗坊主の間には問答といふことがある先づ第一に一切衆生に佛性があるかどうかといふ問題が出て來（ク）る無門關といふ本の始めに出てゐる・それから南泉といふ坊主が猫を斬り殺して解決したといふ說話が出てゐる・これを南泉斬猫といふ誠につまらん話しである是れ等の說話の要領は・要するに執着（シウジャクと讀む）といふて・人間が一旦かぢりついたが最後・どこまでもかぢり附てゐようとする其の惡るい料簡（リャウケン）を脫却させ樣とする方略に過ぎぬのである・然るに坊主・曲彔（キョクロク）に腰を掛けて物體らしく如意と拂子（ホッス）を持ちながら・斬猫の由來などを作麼生（ソモサン）とか正當恁麼時（ショウトウインモノトキ）なんて・論語や孟子・史記や左傳に出てゐない樣な・言はば普通の人に餘り用ゐられてゐない樣な・唐末宋初の俗言鄙語を使用して物體らしく講釋するが・實は全くつまらぬことである・然もそれを鎌倉の建長寺あたりまで出かけて・軍人などの古る手が拜聽する・誠

にお目出たいことではないか

抑も人間には慥に執着といふ惡るい料簡がある・見玉へ馘首された人間を!!出てゆけと言はれたら・サヨナラ・長らくお世話になりましたありがとうございました・といふて涼しい顏を見せつつサッさと出て往つたらよいぢやないか・若しも亦今一度來て呉れと賴まれたら・アア參ゐりませうと言ふて又又涼しい顏を見せてやるがいいぢやないか・こんな心持になれば第一に自分でも氣樂であり人にも面倒をかけさせないで濟む・然るに・なんとかして大臣の倚子に腰掛けて見たいと思ひ込んでゐる矢先きに橫間（ヨコアイ）から其の倚子に腰掛けようとする者が現はれる・そこでスッタもんだの喧嘩が始まる・禪學の本旨意はこんな馬鹿氣た喧嘩を・此の世に無くしようとするものであるのに・そこに氣がつかず生臭坊主の駄法螺に釣り込まれて夏休みの暑い盛りに禪寺へ籠城する・小學校の先生どものお目出さ加減が氣の毒でたまらない

動物學者の說を聞いて見ると・動物には保護色とか擬態とかなんとか・橫着な性質が天然自然に備はつてゐるそうだが・或は左樣かも知れんと思ふ・喧嘩するときに・目をむき出したり・肩をいからさせるなども保護色の一種か擬態の一種であらう・議論するときに・大きな聲を出したり・投票箱を踏みつぶす樣な馬鹿氣た眞似をしたのも矢張り保護色の一種か擬態の一種であらう・それから名刺へ何々幹事とか・何々委員長とか乃至何々博士なんてことを書込んで摺らせるのも是れ亦保護色の一種か擬態の一

種であらう・坊主が緋の法衣（コロモ）を着て白毛の拂子を左右に靜（シヅ）靜と振りかざすなども亦同じく保護色の一種か擬態の一種であらう・從つて禪坊主が禪語と稱する一種特異な術語を使用して・聽者を瞞着するが是れは慥に保護色に相違ない・廓然無聖とか法身覺了なんて素人（シロト）に鳥渡解（ワカ）りにくい樣な熟語を擔ぎ出して・そして呵呵大笑・以て「禪は深遠なり」らしく說話する・などは正に是れ一種の保護色擬態に相違ない

鏡といふものは光線の無い・暗い處にあつては・何の効能も顯はれない・光が射（サ）し來れば・其の光の影が鏡中に現はれて來（ク）る・此の鏡中の影像を學者は心像といひ坊主は對法といふが・此の心像は鏡の曇れるときと清淨なときとで・明瞭の度合ひが違ひ又鏡の面（メン）の凹凸平坦等によりても亦形狀が違ふものであることは中學の生徒等も已によく知れる處である

死んだ人間には心といふものが無いが・生きてゐる間には心といふものが必ずある・此の心が卽ち鏡である・梅を見て梅と知り松を見て松と知り乃至女を見て女と知り美人を見て美人と知る・それはいづれも心の鏡に映つた心像であるが・心の鏡が若しも曇つてゐるときは其の心像の像ははつきりしない・痘痕（アバタ）がふくぼに見えたり・腐れ繩が蛇にも見える樣になるのである・それで人間は或は喫驚（ビック）りする樣なことにもなり或は惚れ込んで夢中に注（ッ）ぎ込む樣なことにもなるのである・禪宗といふものは本當な處は唯此の心の鏡の曇りを取り去る手段方法に過ぎぬのである・金剛般若經といふお經の中に應無所住・而生其心といふ有名な文句がある禪宗の慧能といふ大禪師は焚木を脊負つて或町を賣り歩るいてゐたとき・此語を聞いて・それで悟りを開いたといふ程な・有名な文句だが・實は心の鏡を淸淨無垢にすれば・それでよろしい・人間の學問は是れ以外に別に目的は有るのぢや無いと言ふに過ぎぬことである

言ひかゆれば人間には執着心といふものがあつて・それがため世間に不祥事件や不吉な事件が起つて困る・そんな事件を無くして此の世を平和な世界に改造しようと思つた・其の慈悲が阿彌陀樣だの如來樣だの乃至ゴットだのエホバなんてものを作り出し・そして其の揚げ句・禪問答なんてものをやり始めたのである此の理窟を知らずに禪坊主の問答は仲仲面白いなんて有閑紳士が知つたかぶりに禪語などを口にするのは全く滑稽千萬なのである

抑も人間世界に執着心ほど邪魔なものはない・額（ヒタヒ）に瘤（コブ）の一ッや二ッ出來ても・それはたいして邪魔にはならぬが・執着心ほど邪魔なものはない・此の邪魔さい無ければ人生は靑天白日・全く朗なものであり・そして天下は全く泰平となるのである・たとへば下女が茶碗を毀（コワ）す奥さんが・困るぢやないかといふ・毀すつもりで毀したのではありませんといふ・毀すつもりで毀されてたまるものかといふ・是れが奥さんと女中との喧嘩であるが此の奥さんに若しも惜しいといふ執着心が無つたらば・此の喧嘩は起らぬ筈である・貸した金の取れぬに心を怒らせ・餘りに激しく催促した・それがため

農學士の山憲は鈴辨を殺し鋸で四體を滅茶苦茶に切りきざみ・トランクに入れて東京から越後まで持參して信濃川へ投げ込んだではないか殺す奴も惡るいが殺される奴も・執着心が多過ぎたのである・であるから世の中の出來事は大概執着心が原因をなしてゐるといふべきである・所で執着心が全く無い樣になれば動物世界の如く人間世界にも文化なんてことが全く無くなるのである・然るに人間には惚れ込むといふ樣な執着心があるので・さては戰爭もあるが爭議もある・けれども同時に又發明もあり發見も出來・そして文明開化といふことも見られることになるのである・禪宗坊主の期待する如く人生から執着心を全然取り去つて見玉へ・此の世界は全然動物世界同樣になつて面白い事も可笑い事も乃至悲(カナシ)ひことも難儀(ツラ)さこともなくなつて索然たるものとなるであらう・かくてはつまらぬこととなるから・さては面白い事ばかり・可笑い事ばかりに爲(シ)て見ようと思ひ・其の方面に向つて努力もし・苦心もして見た人も少くはないが・樂あれば苦あり・富貴貧賤・榮枯盛衰は車井戸の釣桶(ツルベ)の如きもので・どうしても分離することの出來ぬものであることを發明した昔の聖人は吾々に中庸といふことを敎えて呉れたのである・過ぎたるは・猶ほ及ばざるがごとしと申されたのがそれである・が・其の中庸が仲仲六つかしいもので右か左か・どちらかへ片寄りがちなものであるから・そこで其の釣合を保持させるため・聖人は更に吾々に禮儀といふものを敎えて呉れたのである・たとへば親の死んだときに・幾ら悲痛に迫つても夢中になつては・いかんぞ・去ればとて犬・猫の樣に平然(ケロリ)つとしてゐてもいけない・適宜に悲(カナシ)んでゐるがよろしいぞと敎えた樣なのが其の一例である・それと同じく男女の愛といふものも其の通りだ・全く無つたら子供も出來ないし・無闇に有り過ぎでも腎虛になるの虞(オソ)れがある・そこで程よくラブもするがよろしいと敎えてあるので禪宗の坊さんも・ぬかりなくお大黑樣をだきこんでゐるのである・肉食(ニクジキ)妻帶(サイタイ)惡いことぢやないが・御伽噺の樣なことを說いてきかせて・それでお大黑樣を養ふ樣なことは甚だ不都合な事と言はねばならぬのである

凡そ世の中の事は・すべて一方に片付得らるべきでない・例へば馬は大きいといふても象よりは小さい・蟬は小なりといふても螢よりは大なるが如しである・是れと同じく三井岩崎は金持なりといへどもロックフエラアやカアネギイには及ばざるべく・恩田重信は貧乏なりといへども姉や妹よりも多額の資產を有してゐるのである・此の呼吸を呑込まぬと・不平や不滿が起りやすくなり遂には嫉妬をも起し爭論をもおつ始めるのである・是れが偏執(ヘンジウ)といふて馬鹿の一類に屬するのである・世の中に怖ろしいものが澤山あるが・此の偏執の馬鹿ほど怖ろしいものはない・往年金輸出禁止を解禁して殺された大臣もあつた・又其の解禁を再び禁止して殺された大臣もあつた・解禁が善いものやら再禁が善いものやら實際は的確に識ることが出來ぬのである・蓋し解禁せねばならぬと固執し又再禁せねばならぬと固執する・そこに殺伐な現象も起り不祥な事件も起るのである・命(イノチ)だつて其の通りだ・惜

しいと思ふから死に耻をかくのである・然し惜しくないと思ふても敝履を棄てる様に製糞器を棄てるにも當らない然らばどうしたら善いかと問ふ人もあるだらうが答へる方でも實はどうしたら善いか判らんのである結局は自然の成行きに任せて・一向に我慢を出さぬが最善の道である・自分の今日爲すべき事を一生懸命に爲すが最後の勝利である・我輩の經驗では弓を引いて矢を射るとき・此の矢は是非的(マト)に當てねばと思ふ一念の胸にあるときは・かつて其の矢の的に當つたためしがない・全く虚心たり得たときの矢は・大概は中るが・中らずとも極く近い所に往くのである・個様な譯で心に異念の存する場合の判斷は正鵠を得ぬのが多い・禪學の要諦は此の所謂る異念を拭へ去る方法手段に過ぎぬのである・碧巖錄や無門關を字面通りに覺えても・それは何んの役にもならんのである・そこで禪宗では不立文字といふのである・既に不立文字であるのに・碧巖の講義や維摩(ユキマ)の提唱を拜聽した處で些少の利益も何んにもないのである・況んや禪宗坊主の大きな聲で「ナムカラタンノオ・トラヤアヤ」なんて愚にもつかぬダラニなんてものを有がたそうに聽聞する古る手の軍人や色氣の抜けた後家さん達のお目出さ加減・話題にも何んにもならんに於てをや・梅痴和尚曰く吁々今時の小僧共は役に立たぬ云云サヨナラ

〔三〕　生長の家と天理教

近頃「生長の家」といふ一種の宗教が唱ひられてゐる・其の宗義の中に物質論が出てゐる曰く汝ら感覺にてみとむる物質を實在となすこと勿れ・物質はものの實質に非ず・生命に非ず眞理に非ず・物質そのものには知性なく感覺なし・物質は畢竟「無」にして・それ自身の性質あることなし・これに性質を與ふるものは「心」にほかならず云云又曰く物質は本當は無いものであつて・それは單に「念」の影にすぎないといふことが判ると・吾々は縱横自在・一切の障礙が無くなる云云又曰く念は文字の上で見ても判かる如く今の心とかく・實相界の陰影のことで・有る樣に見えても實は無いものである・例令へば海水に現はれた泡沫の如きものである云云これは面白い說の樣であるが實は極めて平凡なことであります抑も寄り集り物は・當然に確實堅固なものではない・障子でも唐紙でも・倚子でも机でも・いづれも皆寄せ集めものであるから・眞實に有るものではない・卽ち紙と骨との外に障子も唐紙も無い・釘と板との外に倚子も机もない・從つて纖維と糊との外に紙が無く纖維と樹脂との外に板も無いばかりでなく炭素と水素と酸素との寄合ひが植物纖維であり樹脂であるから・能く考ひて見れば纖維も樹脂もないことになるのみならず・プロトンとエレクトロンを取去れば水素も酸素も無いことになる・そこで今日では學者の中に天地一元論といふ樣な說が出てゐるから・生長の家で「物質を實在となすこと勿れ」といふのである・のみならず人の心といふものは少くも知情意の三ッのものから成立つてゐるから心も寄せ集めものであるから・無いのも無理はない況んや佛典によれば人の心は或は六十五法から成つてゐ

るといひ又或は百法から成つてゐるといふに於てをや・此の意義からいへば生長の家の論説は面白い論説に相違ないが・こんなことを土臺にして組立たものを信仰して有がたがる現代人の愚蒙こそ憫然の至りではないか??

もちろんデカートRené Descartes (1596—1650)が「我思ふ・故に我有り」cogito, ergo sum(Ich denke, also bin ich)などと言ふたことは陳腐にして取るに足らぬが・今の頃「物質はものの實質に非ず」なんてことを說き散らして愚夫愚婦を引寄せて・勿體ぶることこそ可笑なものぢやないか

目に見ゆるものを・其のまま實在物として信ずる人々の愚も笑ふべきだが・是れは研究の足らぬだけで大きな罪はないが・其の愚につけ込んで愈々ますます人を愚にして・それを自己生活の資料に供するのは其の罪決して少くない・もちろん釋尊も五十年間無我を說教されたが・それは我慢を取去つて安心立命に導き入れんがための方便に過ぎぬのである・俗慾から出發された御說教ではなく・拔苦與樂の大手術を達成し以て大醫王たるの功名手柄を收めんための御苦勞であつたのである

現代に又天理教といふものがある其の教義に曰く天理教の根本精神は・かりもの・かしものの教理であります・かりものかしものと言つても・お判りにならないかも知れませんが・つまりこの世界の一切は神様の思惑と御守護に依つて生かされてゐるといふ信仰です・天保九年十月二十六日に教祖中山みき子様の口を通じて人間の元の親・實の神様が發表されたのですが・この十月二十六日を遡ること九億九萬九千九百九十九年前・月日の二柱の神が人間といふものをこしらへて・その人間が陽氣に暮すのを見て樂しまうではないかといふ相談の結果・人間が作られ・そして人間のため食物の外・色々のものがつくられて・今尙一切のものが神様の御守護に依つて生かされてゐるのであります・これが天理教の根本です云云又曰く然も人間に病氣や災難や色々の事件が起つて人間が苦るしめらるるのは蓋し人間が生活して行く上に我が身勝手な・他人はどうなつてもよい・我れさへよければよい・といつた様な心使ひ・卽ち(一)ほしい(二)をしい(三)かわい(四)にくい(五)うらみ(六)はらだち(七)よく(八)かうまん・この八ッの埃(ホコリ)(罪)を使つて來たのが積り重なつて惡因緣となつて病氣や災難などが現はれて來るのであります云云これが天理教の教義であるが・此の教義は實(ジッ)の處天主教の教義に據りて・それを燒き直したものに過ぎないのであります・キリスト教では神は天地萬物の創造者であると申して居ります・そして造られた人間がエデンの花園で・神の掟(オキテ)に背きて林檎を食ふたので苦の種が人間の心の裡に造られ・それが原罪となつて人間が此の世で苦難に罹るのであると教えて居ります八つの埃といふのはキリスト教の原罪に相當するのでありますが・天理教では其の苦痛の原因は慾であるから・其の慾を除却すれば・すべてが朗かとなるものだと教ゆるので・天理教信者の病根の深く入り込んだものは家財道具はもちろん・屋敷や田地までも殘らず賣り飛ばして・丹波市へ注ぎ込むことになるのであります・もちろん此の浮世は慾の世界には相違ないが・理智に乏しい愚夫愚婦を欺瞞する一

條に至りてば容捨の出來ない惡宗教なのであります

〔四〕般若心經の解說

佛教經典の中に摩訶般若波羅密多心經といふものがある文字の數はすべて二百七十一個ばかりで極く小さなお經だが此のお經が仲仲善いお經なのである・其のお經の一番冣初の處に五蘊皆空の文字がある・是れが卽ち「生長の家」で「汝等感覺にてみとむる物質を實在となすこと勿れ」と言ふて敎えてゐる原理原則の根本である・そして其の次に「色は空に異ならず・空は色に異ならず・色卽是空・空卽是色」といふ人口に膾炙した善（イ）い文句があるが此の文句の說明は普通の坊さんや和尙さんには・出來ないものであるが吾々は科學的に容易に之を說明し得るのであるから・茲に一閑（ヒトクサリ）其の說明を試みて見よう

赤小豆（アヅキ）から造つた餡粉（アンコ）に寒天の水溶液と白砂糖とを加えて稠度を適當にして冷却し堅めれば・それが卽ち羊羹である此の羊羹の甘味は加えた砂糖の分量によるのであるから・若しも砂糖を全然加えずに堅めた羊羹ありとすれば其の羊羹には甘味が無い筈である・凡そ物には體と相（スガタ）と用との三ッの標徵が具はつてゐるもので此の標徵が無ければ其の品物（シナモノ）は無いと斷定することが出來るのである・然し此の體・相・用の三ッは必ず不可離なもので其一ッが缺（カケ）れば他の二ッも同時に缺けて・其の物は完全に存在の價値を失ふものである・此の故に・若しも羊羹に甘味が無いならば其の羊羹には砂糖が包含されて居らんと斷定し得るのである

然るに吾々の實驗によれば水は水素と酸素とから成立つてゐるのであるに水には水素の燃ゆる性質も顯はれて居らず又酸素の他物を燃やす性質も顯はれて居らぬのであるから・然らば水には水素や酸素が含まれてゐないかといふに・電流を水に通ずれば忽ち水素は右に酸素は左に顯はれて來（ク）る・是れは實驗の說話だが・さて此の場合に水の中（ナカ）に水素ありといふか酸素ありといふか・乃至水素も酸素も無いといふべきか・恐らくは淨名居士や達磨大師でも「有る」とも斷言し得ざるべく「無い」とも斷言し得ぬであらう・禪宗は偏執の妄を打破するが本職だから常（ツネ）平生に「有（ウ）にあらず無（ム）にあらず百非を絕す」と說いてゐるが・然し其の實際の處は有無の中間が本當なので是れを空といふのである・有（ア）るでもなく無いでもない・それが佛者の空（クウ）といふもので此の空は理窟や・言說で說明して聽かせることが出來ないから以心傳心不立文字といふのであり・そして「色卽是空」（物質は卽ち空）といひ又「空卽是色」（空なる處に物質が有る）といふのであり・そして更に不生不滅・不增不減・不垢不淨などと說いて空の理を敎えたのが此の般若心經なのであるが・實（ジツ）の處は偏執や妄執や迷妄を打破し文字や言說上の閑葛藤から離脫させて・無用の戲論を絕滅する手段方便に過ぎぬのであるが・其の實際の處は死ぬとか・消ゆるとか・悲（カナ）しいとか・愚夫愚婦のつまらぬ・クヨクヨした料簡を脫

却させる手段方法に過ぎぬのである・尙今一ッ本當の處を言へば門徒坊主が阿彌陀樣の大慈悲を說いて愚夫愚婦の偏執を除去せんと努力する・其の方便と少しも違ふ所は無いのである・此の方面から言へばゴットを說くキリスト敎も阿彌陀を說く一向宗も乃至岡本おみき樣を崇敬させる天理敎も其の他大本敎でも金光敎でも人の道でも生長の家でも・人間に惡事をさせぬ樣に心配する處は悉く一樣同趣であるが・夫れを己れの衣食の具に利用して己れのみ榮譽榮華な生活を送る・それが憎くむべきことなのである

それから今一ッ般若心經の中にこんなことが書いてある卽ち空の中には色(シキ)(物質)もなく受想行識(知情意)もなく眼耳鼻舌身意(感覺・觸覺等)もなく色聲香味觸法(光明・音聲・臭香・味ひ・堅軟等)もなく・眼界もなく乃至意識界もなく無明(キリスト敎義の原罪)もなく・無明の盡くることもなく乃至老死もなく老死の盡くることもなく・苦集滅道(吾々の苦の原因や其の苦を滅する方法)等もないとかいてある・が・是れとて難解(ムッカシ)いことぢやない・要するに此の世界は見る通りで千年萬年過ぎても生れるものもあれば死ぬものもあり・美人もあれば醜婦もあり金持もあれば貧乏人もあり・學者もあれば馬鹿もあり・聖人もあれば盜跖も現はれる・病氣で難儀するものもあれば病人の多いのを欲する醫者もある平和のために苦勞する聯盟もあれば・戰爭のために努力する伊太利もある・此の世の中はいつも同じことだ・それを心配するのは愚の骨頂だぞと敎えさとしたのが此の般若心經なのであるが・三千年來此のお經が宣傳されてゐるが此の世の中の情態には變りがない・たまたま貧苦に責めらるるものもあれば意外に金を儲けて樂をなすものもあるが・それは自分自身の行蹟に由來するもので・死ねば貧苦も無くなり快樂も無くなり萬靈同一歸趣であるのである・般若心經はこんなことを悟らせて・拔苦與樂・一時の氣休めを得させんとする手段方便に過ぎぬのであるが・然も勿體ぶつてギャテイ・ギャテイ・ハラギャテ・ハラソウ・ギャテイ・ボチソワカなんて・俗耳の愚なるにつけこんで・こんなダラニを有がたそうに唱ひて・お布施頂戴に無我夢中になる坊主こそ氣の毒千萬ではないか

〔五〕碧巖錄の第一則の談話

禪宗坊主の講釋といへば先づ第一に持出すものが碧巖錄(又碧巖集ともいふ)であり・そして其の次が無門關であり・そして其の次ぎあたりに維摩經の講釋に遷り證道歌の吟誦などに遷るのであるが・概して禪坊主の言ふことは・普通の耳には聽取にくい事ばかりである・それ故俚諺にさへも「わけのわからぬ談義を禪坊主の問答の樣だ」と言はれてゐる・が・實際は偏執を取去るだけのことで・理窟も無ければ說明もないのである・然もそれが六つかしく聞ゆるのは其の用語が唐末宋初の俗語であるからである抑も碧巖錄といふは宋代の圓悟禪師といふ禪宗の坊さんが雪竇(セッチャウとよむ禪宗の坊さん)の書いた頌古(ジュコとよむ)といふものに註釋を加へて作つたもので西暦一千百十一年乃至一千百十七年

頃の作品であるから今を去る約八百年前の著書といふてよろしいものである・所で其の頃の俗語が漢晉時代のそれと餘程違つてゐるので・特別に研究せぬものには判りにくいので・さては禪坊主は素人の目に餘程學問がある樣に見ゆるのである・例令へば正當恁麼（シャウトウインモ）の時とか・若し恁麼（インモ）に見得せばとか・這（シャ）の不唧溜漢（フソク・リウ・カン）とか・果然として摸索不著（モ・サク・フ・チャク）とか・一場の㥜懼（マラ）を免れず・とか・なんとか言ふの類で・こんな術語（タアム）のため先づ第一に毒氣を吹き掛けられ・それで參（マキツ）て仕まう人が多いのであるが結局は問答でも公案の工夫でも人間から執着心や妬心や慢心などを取除かんがための手段方法に過ぎぬのである

鳥渡說明するが禪坊主の用ゆる特種の術語は・多くは發音を宇音で書き現はしたものであるから・意味は同じでも書き現はした字體が色々に違ふてゐるから・此の邊にも注意する必要があるのである例令へば恁麼を甚麼とかき・不唧溜を不唧嚠とかくが如きである・唧溜は俗語で敏捷といふ義であるから不唧溜といへば不敏といふ義で馬鹿野郎とか鈍馬（トンマ）とかいふ意味なのである・禪坊主の講釋を聽くときは・十日や二十日間はこんな文字や術語で惱まされるのであるから・其の積りで辛抱せんければならぬのである

そこで碧巖の第一則に遷るが抑も南印度に香至王と言はれた王樣があつて其の王樣の第三番目の皇子が菩提多羅（ボダイ・タラ）と呼ばれた人で・此の人が出家して後菩提達磨（ボダイ・ダツマ）（ボヂ・ダルマ）と改名された・それが我々に能く知られてゐる達磨さんのことである・此の達磨さん三年の歲月を費して支那の南方の廣州といふ處へ渡られ大通元年といふから西曆五百二十七年の十月金陵卽ち今の南京に到りて梁の武帝に面謁されたのである・武帝は格外な佛敎信者であつたため直ちに達磨に問答を仕掛けられたのである卽ち劈頭先づ第一に「聖諦第一義は何んであるか」と問ひかけられたのである・達磨は言下に「廓然無聖」と答えた・すると武帝は更に「朕の前にゐるものは誰れか」と問はれると今度は達磨「識らず」と答えた・そこで此の問答は一應濟んだのであるが濟まぬのは武帝の胸の裡である・思ひらく・朕は此の如く佛を信仰し自ら放光般若經をも講じ相當に佛敎の書物をも研究してゐるのみならず物質的には塔を建て・寺を造り・僧侶をも澤山に養成してゐる・個樣に善行を積んだら定めて大なる功德が社會に光被してゐるに相違ない・是れに就て達磨に一ッ質問して見樣と思し召され・卽ち達磨に向はせられて

朕は寺を建立し僧侶も澤山に度したが問ふ何んの功德やあるぞ

と御下問になるや達磨は又々言下に「別に何等の功德もありません」と奉答し・そして達磨は心の裡で思ひらく

此の天子・隨分慾の深い人ぢやナア・人に物を與えて其の反禮を取らうといふ樣な料簡で人に物を惠（メグ）んだのぢや・少しも恩惠にはならん・言はば商賣的と言ふべきだ・錢を下駄屋に與え

て其の代りに下駄を手前に受取る・それでは下駄屋に錢を惠んだ事にならん・こんな料簡で幾ら寺を造らうと塔を建てようと・それの功德にならんことや恩惠にならんことは當然のことである・だから己（オ）れは「無功德ぢや」と答えたのである・こんな慾の强い武帝などに交際すると油雜巾に觸れる樣なもので己（コチラ）の身が穢（ケガ）れる・去るべきだ

とつぶやきながら・揚子江を渡り・洛陽の南・嵩山の少林寺を訪（タヅ）ねて・そこに面壁九年の坐禪をなしたのである・蓋し武帝の樣な料簡で人の世話を爲（シ）たり社會のため盡力してゐる人は今日でも・いつの世にでも澤山あるのである之れが世情の常態であらう・此の常態は我輩・決して除き得ざるものと信ずるが故に・此の方面から見ても禪宗は須らく改造すべきものと言はねばならぬのである・況んや今日の禪宗寺の坊主に於てをや・お大黑樣を抱き込み・巫山戲た夢を見ながら・牡丹を造り菊を育て・そして生花やお茶の湯で若い女や愚昧な老婆など呼び込み・體裁の善いことを言ひながらお布施を捲き揚げて以て其の豐かな生活に享樂の出來放題・享樂するに於てをや

〔六〕　觀音經の解說

俚諺に「門徒物知らず・法華骨なし・禪宗錢なし・淨土情なし」といふてあるが實際は門徒にも南條文雄博士の如き學者もあり法華にも田中智學氏の如き骨もあり血もある人があつたが大體に於て萬有理學に眼光の屆かぬ人が多い樣であるから・どうも宗教上にも花が咲きかねてゐる樣である・お說教を時々あちらこちらと聽いて廻はつて見るに・所謂る說教集ぐらゐを種本として一席を糊塗してゐるに過ぎぬ觀があるのである・要するに今日の人間はキリスト教の原罪だの佛教の無明なんてことを今ちつと科學的に說明し得ぬ限り・お說教は餘り効能を現はさぬだらうと思ふ

法華宗は又日蓮宗とも呼ばれて日蓮上人が命がけで建立した宗旨であり・そして其の所依の妙法蓮華經は・もちろん最上乘のお經として尊崇されてゐるお經で二十八卷（二十八品）から成つてゐるものだが其の法華經が亦阿彌陀經などと同じく其の內容は極めてつまらんものである

成る程・諸佛ばかりぢやない・斯く言ふ恩田重信も第二卷方便品の有名な文句の通り「一大事因緣を以ての故に」此の世に出現して

三界は安きことなし猶火宅の如し衆苦充滿して甚だ怖れ畏るべし常に生老病死の憂患ありて其の火・熾え燃えて息まず・所で如來は己に三界の火宅から離れ・寂然として閑居し林野に安處したり・しかも此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり・しかも此の處は諸もろの患難多し唯我れ一人能く救護を爲す

といふてある通り衆生濟度・拔苦與樂・治國平天下のために筆も執り口角に泡をも飛ばすのであるが三千年の昔しなら兎もかく今日の文明世界に法華の如きつまらんものを以て社會人類を善道に導かんと

するは到底不可能のことと言ふべきである

法華經二十八品(品はボンとよむ)の中で最も多く讀まれるものは其の第二十五番目の普門品であるから・念のためそれを解剖して・どんなことが書いてあるかを明かにして見せませう・此の普門品は詳細にいへば「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」と言ふべきもので其の内容は此の觀世音菩薩の功德(コウトクとよまず・クドクとよむ)を詳述したに過ぎぬのである・先づ初めに無盡意といふ菩薩があつて・其の菩薩が佛様に「何んの因緣で觀世音と申し奉るのでありますか」と問へば佛様は「それは個様なわけである・千百萬億の衆生が諸もろの苦惱苦難を受けたとき・一心不亂に南無觀世音菩薩・南無觀世音菩薩と唱へて此の佛を呼べば此の佛・其の唱名の音聲(オンセイとよまず・オンジャウとよむ)を觀照し玉ふて・爲めに其の苦惱苦難から解脫せしめ玉へるによりて觀世音菩薩と申し奉るのであると答へられて・それから段々其の功德を具體的に陳べられたのが此の普門品であるのである・が・ここに鳥渡注意すべきことは・其の功德の顯はるる理由の說明である・見玉へ麻醉藥の功能を・モルヒネとかコカインとか・アドレナリンなんて麻醉藥一名麻藥(麻は魔の略字である)には種々様々あるが・大別して全身的麻醉藥と局處的麻醉藥との二種に區別するのであるが・いづれにしても其の藥の及ぶ範圍卽ち區域は莫迦になり無感覺になり無意識になるのである・コカインといふものがある其の水に溶したものを齒莖(ハグキ)に深く注射針で注ぎ込めば釘拔き(拔齒器)で齒を引拔いても痛(イタ)くない・若し顎(アゴ)の一部に此のコカイン溶液を注射すれば顎骨(アゴノホネ)の一部を截除(キリトリ)ても痛くないのである・個様な藥を局處麻醉藥(ロカアレ・アネステチカ Locale Anaesthetica)といふ一局處の神經を莫迦にするクスリといふことである・又コロロホルムといふものがある・之れを霧(キリ)の様にして鼻から嚊(カガ)せると・全身が莫迦になつて腹(ハラ)の皮を截(タ)ち割つて子宮を取出しても當人にはそれが判らず・頭の骨を鋸(ノコギリ)で切開いても當人にはそれが判らぬのである・個様な狀態を全身麻醉といふのである・南無阿彌陀佛を一心不亂に唱ひ南無觀世音菩薩を一心不亂に唱ふるのは・丁度自ら全身に麻藥を注射する様なもので・左様な麻藥中毒患者にありては・どんな大手術を行ふても・慥にそれを感知せぬのである・十字架上のエイス・キリストの如く・左右から脇腹(ワキバラ)を鎗(ヤリ)でヅブりつと刺されても其の痛(イタミ)が判らぬのである・石川五右衞門も釜で煮られたが多分少しの苦痛も感知しなかつたであらう・今の言葉でいへば是れが「精神統一の結果」といふのである・であるから・阿彌陀様や觀音様ばかりぢやない・馬の骨でも鰯の頭でも何んでも一心不亂に念(ネン)ずれば全身が麻醉するから・一切の苦痛を忘れて仕舞ふのである・そこでお釋迦様が「一心不亂に南無觀世音菩薩を念ずれば一切の苦惱から解脫する」と仰せられたのである・是れは決して嘘言ではない・觀世音菩薩を一心不亂に念ずれば

(一)大猛火の中にありても燒けない

（二）大洪水の中にありても溺れない

（三）珊瑚や眞珠を取らんとして大海に入るも溺れ死ぬことはなく食人鬼の島へ漂着しても殺されることはない

（四）刀杖を所持した惡漢に害せられんとする時にも其の刀杖が折れて難を受けない

（五）怨賊（オンゾクとよむ）の群居する西蕃區域内の如き所を通行しても少しも恐怖（コワ）くはない

（六）婬欲の勃發して耐え難い時でも其の苦難から責められない憤怒の發情に耐え難い時でも其の激情の害を受けない

（七）子供を儲けたいと思へば男の子でも女の子でも求め得られ

（八）其の他一心に念じ最勝に稱名すれば何んでも叶はぬといふ事はない

と個様にお説きなされたのである・是れが普門品の總意であるとして・讀者諸君!!考へてごらんなさへ果してこんな都合のよい佛様が有るものでせうか??日蓮も或は内心・我輩と同じ様な考ひを持てゐたかも知れんが・かく言ふては身も蓋（フタ）もないから・さては立正安國なんて世人の好（ス）きそうな標語を提出して・破他自立の大欲望を實現せしめたのが今日の日蓮宗であるのである・從つて今日でも日蓮宗の坊さんには日蓮上人の様な熱のある人が多いのである

然し單に立正安國では愚夫愚婦の信仰といふものを買收することが出來ないから・矢張り立派なお袈裟を掛けて南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と鬚（ヒゲ）題目（ダイモク）を唱ひながら珠數も繰（ク）り拂子も振らねばならぬのである・が・要はバイブルでもお經でも中身（ナカミ）はつまらんもので科學的知識の盛んな・インテリの多い當世には適合しなくなつたのである

抑も日蓮は元來喧嘩腰の强かつた男であつたから破他自立の戰法に依り

念佛無間・禪天魔　眞言亡國・律國賊

と高言・以て他宗を罵倒したが是れは必ずしも非難すべき事でなく・寧ろ普通一般の茶飯事であるのである・蓋し人間といふものは他の動物に比して執念の異常に强いもので一旦斯（カ）くと思ひ込み一度是れがと信賴したが最後・其の思ひ信ずる所を以て最良となし最善なりとなして動かぬものである・論語にも「三軍・可奪帥・匹夫・不可奪志」とかいてあるが實際初志を翻へさせることは頗る困難であるが去ればとて昨日然諾した事を今日否認し裏切る様な人間が澤山に居りては取締りに甚だ困らざるを得ぬ事である例令へば昨日見合ひしてお互に「是れなら良からう」「彼（ア）れなら良からう」と婚約を定めたのに今日に至り「彼（ア）れぢや面白くない」「彼（ア）れぢやまずい」と手の平を反へす如くに變心されて見玉へ・やりきれたものでない・だが「二心俱起せず」で・好（イ）いと思ふてゐる時には醜（ワル）いと思ふ心が生ぜず是（ゼ）なりと定（キ）めてゐる時には非（ヒ）なりと思ふ心は生ぜぬので・ここに信用すべき所もあるのである・約を守るといふことも・ここに依つて成立するのである・日蓮が剛情であつ

たと言はれるのは・專心一意にして餘念が生じなかつたためである・念佛無間・禪天魔を眞理なりと固信して・さては他宗を無闇矢鱈に非難攻擊したのであるが・豈に計らんや

念佛は極樂で　禪は菩提
眞言は興國で　律は淸福

であることを・西洋人でも少し悟つた人は「各々其の宗教を最善のものとしてゐる」Jeder halt seine Religion für die beste と謂ふてゐる・學者殊に道學者は此の位な雅量をもつてゐて・靑筋(アヲスヂ)たてゐ樣心がけねばならぬのである・蓋し本當に悟りが開けて

有(ウ)にあらず　無(ム)にあらず
大(ダイ)にあらず　小(セウ)にあらず
可(カ)にあらず　不可にあらず

の中道の妙理に體達した人は日蓮の如き惡口をば決して出さぬのである・是れが禪の本當の要諦なのであるが・然らば其方(ソナタ)はどうですかと我輩に訊問する人あれば我輩は「我輩未だ開悟せぬ・故に此の既成宗教撲滅論を草するのである」と答へておくであらう

〔七〕眞言宗と陀羅尼の解說

佛教の一派に眞言宗(シンゴンシウ)といふのがある紀州高野山は其の大本山で弘法大師が日本に弘めた宗旨であるが其の由來は個樣である曰く南印度の摩賴耶國(その地・未詳)に金剛智と言はれた坊樣がゐた・此の坊樣が西曆七百十四年頃(卽ち今から千二百二十年程以前)に大智・大慧・不空等の一行を連れて支那に乘り込み・大きな曼陀羅 Mandala (淨土の實相圖)を作つたり莊嚴な灌頂式授戒道場などを建設して佛教弘通に努力し殊に眞言秘密の法と稱し

オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン (光明眞言)

なんて・意義も何んにも・譯けの判からぬ・猫の寢言の樣なことを唱ひて以て無智な老若男女を引きつけた・それが支那に於ける眞言宗の始めである・所で四國の讃岐の國に佐伯某(ナニガシ)といふ人があつて其の長男に生れたのが弘法大師と尊敬された人でイロハ四十八文字を作り出し我々に無量無限の利益を貽して下された空海和尙殿であつたのである・此の和尙・入唐して長安に乘込み・そこの靑龍寺の怪僧で金剛智の衣鉢を受け嗣きたる慧杲(ケイカウ)阿闍梨に就て敎を受け兩部の大法秘印なるものを深く心裡にをさめて大同元年丙戌の八月(西曆八百零六年)歸朝して此の宗旨を開き傳へたのであるから奇蹟的の事柄が頗る多いが敎義其のものには餘り面白い事はない

此の眞言宗で信者に讀ませるものに毘盧遮那(ビロシヤナ)佛說金剛頂光明眞言陀羅尼經といふものが

ある・前文中に光明眞言と標示したものがそれである・此の經文は金剛智と一處に支那に渡來した不空三藏の譯である・此の三藏は印度セイロン島の人で本名は印度語で Amuchiipachohlo といふたそうである印度へ一旦歸つて再び支那に渡來し大曆中(西曆七百六十六年至七百七十九年間)に長逝した人である

光明眞言といふものを漢字で書くと左の如くなるが・唯では讀めるものでない・そして何んのことやら少しも判らぬものなのである曰く

唵・阿謨伽・毘盧遮那・摩訶・毋捺羅・摩尼・鉢納摩・人縛羅・鉢羅韈多耶・吽　(眞言陀羅尼の解說から)

on abokya beeroschano maka bodara mani handoma jinbara harabaritaya un

〔語解〕唵……歸命
阿謨伽……不空
毘盧遮那……大日
摩訶……大
毋捺羅……印
摩尼……寶
鉢納摩……蓮華
人縛羅……光明
鉢羅韈多耶……轉
吽……菩提心金剛不壞

〔句義〕不空大日如來の大印は寶蓮華光明を具し・罪禍を轉滅して菩提心金剛不壞の義を證得せしむ

此の眞言の功德は異常特異で一たび此の眞言を信受して一心不亂に唱ふれば

(一)無量の苦惱災禍を滅除し得べし
(二)福壽を增長して安穩快樂を得べし
(三)大力の魔軍を摧伏して勝利を得べし
(四)怨賊を降伏して慈心を成就し得べし
(五)一切の邪道を除きて正覺菩提を成就し得べし
(六)一切の怖畏を除きて歡喜を得べし
(七)一切の障難を除いて安穩を得べし
(八)貧窮(貧苦)を除いて富饒を得べし
(九)下賤を除いて高貴を得べし

（十）鈍根（愚痴）を除いて利根（怜悧）を得べし

（十一）無量の辯才を得べし

（十二）自然の福德を得べし

（十三）一切の自在を得べし

（十四）一切の所願を滿足し得べし

等等・莫大の功德が具（ソナ）はつてゐるとかいてあるが・諸君!!どう思はれるか??人を馬鹿にするにも程があるぢやないか・是れぢや眞言一唱で軍縮問題も無用となり經濟難も生活難も殘らず烟散霧消して心配も何んにも無用になるぢやないか??然も科學知識の進歩した今日の民衆にこんなトボケた事を說いて恬然として顧みざる坊主共こそ面（ツラ）にくき次第にあらずや高野山にも近頃ケエブルカアが掛つて樂に登れるから先づ登つて・そこの賣店で「新版大師勤行秘經諸和讃」といふ折本でも買つて讀んで見て我輩の言ふ事の妄ならざるを知り玉へ

ついでに禪宗坊主などが佛壇の前や石塔の前などで能く讀みあげて吾々に聽かせる千手觀音陀羅尼といふものを紹介する

南無・曷羅怛那・哆羅夜耶・南無・阿唎耶・婆盧羯帝・爍鉢囉耶・菩提薩埵婆・摩訶薩埵婆・摩

namu karatanno torayaya namu oriya baryokitii shifuraya bodisatobaya mokosatobaya mo

訶迦嚧尼迦耶・唵・薩皤囉罰曳・數怛那・怛寫・南無・悉吉嚂埵・伊蒙阿唎耶・婆盧吉帝室佛囉

kokyarurikyaya en saharabaei shutano tonsha namu shikiryto imo-oriya boryokitii-shifura

楞馱婆・南無・那囉謹墀醯唎・摩訶皤哆沙咩・薩婆・阿多豆輸朋・阿逝孕・薩婆薩哆・那摩婆伽

ritoba namu norakijikiri mokohadoshami saba oto-tyoshyuben oshuin sabasato nomobagya

摩罰特豆・怛姪他・唵・阿婆盧醯盧迦帝・迦羅帝・夷醯唎・摩訶菩提薩埵・薩婆薩婆・摩囉摩囉

mobatetyu tojito en oboryo-kiryo-gyatii kyaratii ikiri mokobodisato sabasaba moramora

摩醯摩醯唎馱孕・俱盧俱盧・羯蒙・度盧度盧・罰闍耶帝・摩訶罰闍耶帝・陀羅陀羅・地唎尼

mokimokiritoin kuryokuryo kemo toryotory badyayatii mokobadyayatii toratora tirini

室佛囉耶・遮囉遮囉・麼麼・罰摩囉・穆帝隷・伊醯伊醯・室那室那・阿囉嘗・佛羅・舍利・罰沙罰沙

shifuraya sharou-sharou momo bamora hotiri ikiiki shinoshino orasan fura shari hazahazo

佛囉舍耶・呼盧呼盧摩囉・呼盧呼盧醯唎・沙囉沙囉・悉唎悉唎・蘇嚧蘇嚧・菩提夜菩提夜

furashaya kuryokuryomora kuryokuryokiri sharou-sharou shirishiri suryousuryou fudiyafudiya

菩馱夜菩馱夜・彌帝唎夜・那羅謹墀・地唎瑟尼那・婆夜摩那・娑婆訶・悉陀夜・娑婆訶・摩訶悉陀夜・

fudoyafudoya mitiriya norakinji tirishuninau bayamono somoko shidoya somoko mokoshidoya

娑婆訶・悉陀喩藝・悉皤羅耶・娑婆訶・那羅謹墀・娑婆訶・摩羅那羅・娑婆訶・悉摩僧・阿穆佉耶

somoko shidoyugi shifuraya somoko noraki nji somoko moranora somoko shirasum omogyaya

婆婆訶・婆婆・摩訶悉陀夜・婆婆訶・者吉羅・阿悉陀夜・婆婆訶・波哆摩羯・悉陀夜・婆婆訶

somoko soba mokoshidoya somoko shakira oshidoya somoko hadomokya shidoya somoko

那羅謹墀・醯伽羅耶・婆婆訶・摩婆利勝・羯羅耶・婆婆訶・南無・喝羅怛那・哆羅夜耶・南無

norakinji hagyaraya somoko mobarishin gyaraya somoko namu karatanno torayaya namu

阿唎耶・婆盧吉帝・爍鉢羅夜・婆婆訶・悉陀都・漫多羅・跋陀耶・婆婆訶

oriya soryokitii shifnraya somoko shitedo modora hadoya somoko

この千手陀羅尼の章句には經によりて大なる相違があつて智通の譯と菩提流志(ボダイルシ)の譯とはしづれも九十四句より成り・そして金剛智の譯は一百十三句・不空の譯は四十句から成つてゐるそうですが・しづれにしても南無阿彌陀佛を唱ひたり南無遍照金剛などを唱ひるのと効果は同じなので結局は法華宗で大鼓を叩きながら南無妙法蓮華經を唱ひて精神を統一するだけなものであります

此の千手陀羅尼を支那文字に譯すと左の如くなります

歸命寶三寶・歸命聖觀自在覺有情大有情大慈悲者・歸命一切尊正教喜語・歸命禮拜我聖觀自在海島香山・歸命賢善順教心大光明一切無貪嚴淨無比一切菩薩童眞天神所謂・歸命觀自在大慈悲者蓮華心大菩薩一切一切離垢大自在心作法辨事度汝聖尊大聖尊能持甚勇光自在行動我最勝離垢解脫

教語弘誓王覺堅固子歡喜佛金剛杵作法無垢作法隨心堅固者勇猛甘露水覺道覺者大慈賢善堅利名聞成就義成就大義成就無爲得大自在成就賢愛成就上妙遊戯成就愛語第一義成就一切大義成就輪無比成就紅蓮華業義成就賢首聖尊成就英雄威德生性成就・歸命寶三寶・歸命聖觀自在成就令我成就眞言句成就(畢)

今一つ阿彌陀如來根本陀羅尼といふものを羅馬字で書いて見せませう・これは我輩が宴會などで隱藝(カクシゲイ)を課せられたときなどに歌ふて滿場のものを笑はせる道具であるから・文字通りに讀んで見玉へ仲仲面白くきこえるのである

Nooboo・aratan・noo・torayaayaa・noomaku・ariyaa・mida・bayaa・tataa・gya・taayaa・arakatee・sam・myaku・sambodayaa・tani・yataa・on・amiritee・amiritaa・do・ohamubee・amiritaa・sam・baabee・amiritaa・kya・raabee・amiritaa・shi・tsudee・amiritaa・tee・see・amiritaa・bikirandee・amiritaa・bikiran・taa・giya・minee・amiritaa・giya・gisa・noo・kiti・kiyaree・amiritaa・dondoo・bisobaree・sarabaa・arataa・sadanee・sarabaa・kiyara・maa・ki・reeshiyaa・ki・shiyayoo・giyaree・sowakaa.

〔八〕 御詠歌と巡禮

近頃の信仰は昔の信仰と其の意味が餘程違ふて來た樣だ・信州の善光寺の如來樣が東京へご出張になつて開帳されるかと思ふと奥州米澤の善光寺樣が東京へ出張されて家元爭ひを始められたのである・サヨカと思へば今日此頃（昭和十年十月二十日）は西國三十三所の寺（テラ）寺（デラ）から觀世音菩薩がいづれも東京へご出張なされ一堂に會合されて・それでお札を賣り下げらるる樣になつたので・お蔭でわざわざ足へ肉刺をこしらへて熊野や那智のお山や槇尾山（マキノヲザン）あたりまで巡禮しなくて濟む樣になつた・西洋でも昔しから巡禮卽ちワルファレンといふことが行はれてゐて神聖な由緒あるお寺や溪谷や殿堂や掛額などを歷巡して或はお賽錢を供へて禮拜（ライハイ）したり見物したりなどしたものだが今はどうなつたか知らん・或る書物には「昔し猶太人が其の約置 Bundeslade（猶太人の約書を納める箱）や殿堂 Tempel などを參觀するため遠國へ旅行したことがある・それが巡禮の起源なるべし」とかいてあつたが・或は左樣かも知れん・ギリシャ人もロオマ人も同じく遠方のお堂や聖林などに參詣すべく旅行したのである・其の旅裝束はウイエランドの詩句に見えてゐる如く栗色の衣裳で・頭には鍔（ツバ）の廣い・貝殼で飾りをつけた帽子を戴き・匏（フクベ）の中空にしたもの（日本ならば瓢箪）に水を入れ・それを紐にて肩掛けに懸け・手には寶石を鏤（チリバ）めたステッキを持ち・そして乘りものなどに乘らず・勞を厭はず旅行したのであります・印度では只今でも佛陀伽耶の聖地へ年々幾百萬人の巡禮者 Pilger が參詣致して居ります・此の巡禮といふことは・もちろん信心から爲（ス）ることではあるが・一面家庭の平和の因緣ともなり又一面には保健衞生の因緣ともなるのであります・善いことでありますが前段に申した樣に三十三所のお札を坐（キ）ながら買ひ集める樣な・インチキな巡禮では・御利益（ゴリヤク）も何んにも無いばかりでなく・却て罰が當つて・家庭に惡魔が覘（ノゾ）き込む因緣となります西洋にも巡禮歌 Pilgerlied といふものが有る樣ですが・どんなことが歌はれてあるか・私には判りませんが・日本の巡禮歌卽ち御詠歌といふものは其の內容・全くつまらぬものであります・例令へば第一番の那智山靑岸渡寺の御詠歌は

補陀落（フダラクとよむ觀世音の別稱）や・岸うつ波は・
み熊野の・那智のお山に・ひびく瀧津瀨

第二番目の紀三井寺のそれは

ふる里（サト）を・はるばる・ここに・きみゐ寺・
花の都も・近くなるらん

第三番目の粉川（コガワ）寺のそれは

ちち・ははの・めぐみも深き・粉川寺・
佛（ホトケ）の誓ひ・たのもしの宮

第四番目の槇尾山（マキノヲザン）施福寺（セフクジ）のそれは

深（ミ）山路や・檜原（ヒバラ）松原・わけゆけば・
槙（マキ）のお寺に・駒ぞ嘶（イナナ）く

等の如きが・それである・なんと誠につまらんものぢやないか・耶蘇坊主連中の方面にも詩篇とか・讃美歌なんてものがあつて・矢張りアアメン連が節（フシ）をつけて歌ふてゐるが蓋しこれが五十歩百歩・いづれもつまらんものである

だが禪坊主連が節をつけて面白く歌ふ所の證道歌といふものは立派な漢詩態で頗る風誦に堪ゆるものであるから・ついでに少しばかり文句を掲出して見せませう・節をつけて歌ふて見玉へ

君・見ずや・絶學無爲の閑道人
妄想を除かず・眞を求めず
無明の實性・卽・佛性
幻化の空身・卽・法身
法身・覺了すれば無一物・本源自在・天眞佛
五陰（物質）の浮雲は空しく去來し
三毒（貪瞋癡）の水泡は虛しく出沒し
實相を證（サト）れば人法無し
刹那に滅却す・阿鼻（地獄）の業
若し妄語を將（モチ）て衆生を誑（タブラ）かさば
自ら拔舌を招くこと・塵沙劫（無限時）ならん
頓（トン）に如來禪を覺了すれば
六度萬行（マンギャウ）體中に圓（マドカ）なり
夢裡・明明として六趣（娑婆の世界）あり
覺（サトリ）て後・空空として大千（三千世界）もなし
罪福も無く・損益も無し
寂滅性（セウ）中・問覓（モンミャク）すること莫れ（以下省略）

どうです・面白いぢやありませんか・一種高尙な哲學ですぞ宇宙觀もあれば人生觀もある・白樂天の琵琶行などに並べて面白い詩であるが・少々長過ぎるので專門に學ぶ坊さんでないと仲仲覺えられない・のみならず・無明とか・佛性とか・五陰とか三毒なんて・術語を完全に知り覺え樣とすれば證道歌一篇だけでも容易なことぢやない・どこかで一冊（二十錢か三十錢だ）買つて寢るひまに研究して見玉へ・御詠歌の如き下らぬものぢや無い

〔九〕和讃の解説

耶蘇教徒の歌ふものに讃美歌 Die Hymne, Der Lobgesang といふものがある・神・ゴットを讃美する神聖な詩歌 Geistliches Lied zum Lobe Gottes である・ヤコビイの詩の句に「そして讃美歌が高座から高座にひびき・精靈が昇天する」

„und Lobgesang ertönt von Chor zu Chor; Die Seele steigt empor"

といふのがある・壯嚴に美くしい歌でも歌はれると死靈も甦生して天國へ往くであらうといふ樣な感情も起きて來るから・讃美歌や祝詞（ノリト）は決して惡るいこぢやないが・それを餌（エサ）にして華美な生活を送るのは宜しくない

日本にも此の讃美歌に似たものがある・名づけて和讃といふ・集つた信者が相ひ和して歌ふ讃美歌だから和讃といふのである・歌意・そのものが厭世的である上に爺（ヂイ）さんや婆（バア）さんが三四十人集つて悲哀な音聲（オンジャウ）で・それを歌はれたら・剛情な恩田重信までが冥入る樣な氣にならざるを得ぬのである・從つて淨土宗の門徒や門徒宗の信徒等が多く此の和讃なるものを合唱するのである・もちろん弘法大師の行狀和讃などは弘法大師の履歷を歌詞的に作つたものだから哀れつぽい所は無いが「西（サイ）の川原の地藏尊和讃」なんてものは・歌ふても聽いても痛く悲哀味を催ふさせるもので爺

（ヂイ）さん婆（バア）さんにあらざる限り・當世には通用せぬものである

抑も西（サイ）の川原とか賽の河原なんてものは原始佛教の想像的捏造物で取るに足らぬものであるのに・今の人間が猶こんなものを信用するのは・可笑（オカ）しなことである

我輩も二十六七歳の頃・阿毘達磨倶舍論などを讀んで其の器世間品の地獄の相（スガタ）を研究し・そして遂に地獄極樂の實有を疑ひ始めたが・それがどうしても解決され得ず三四年經過したが適ま廣島に勤務することになり・同市內の國泰寺の老和尙・倶舍學の泰斗藤井玄珠先生に接するの機緣を得たのである或る夏の日・老師を訪問して

（弟）地獄極樂・實有なりやと尋ねると

（師）實有なりと答へらる

（弟）どこに有りやと尋ねると

（師）そこに有る・といふて庭の泉池に指をさされた

（弟）それは如何なる譯（ワケ）なりやと尋ねると

（師）鵞（アヒル）には極樂で鷄（ニハトリ）には地獄だ

と申されたので我輩は夢の醒めた樣に覺了したので大喜悅裡に席を退き感謝の辭を厚く呈して罷り出でたが・それ以來慰みには佛書も繙（ヒモ）とくが・研究なんてことは一切やめて今日七十五歳になつた

のであるが・藤井玄珠先生程有がたい先生は・幾たび生れ代つて來ても無いと信じて只今に毎朝先生の靈のため佛壇に一杯の清水を供へてゐるのである」此の如く地獄極樂のことが理解された以上は「賽の河原」なんてことも・劍（ツルギ）の山だの・血の池なんてことも彼（ア）の世のことでなく・殘らず此の世に有ることだといふことが判り・自分の如き轗軻不遇の境遇も・思ひ直ほして極樂淨土となし得ると信じ筆を操つてゐるのである・從つて御詠歌やお和讃を合唱し乃至南無阿彌陀佛などを念ずるのも極樂を其の人の心裡に成就する所以と心得て非難攻擊はせぬのであるが・此の理窟を知らずして南無妙法蓮華經を唱ひたり團扇太鼓を叩いたり南無阿彌陀佛を餌（エサ）にして華美な生活をなす坊主が憎くらしいのである

左に西の川原の地藏尊和讃といふものと大震火災回向和讃といふものとを記して・どんなものであるかをお目にかけませう・少し冗長ですが讀んでごらんなさい

此れは此の世の事ならず・死出の山路の裾野なる・西（サイ）の川原の物がたり・聞くにつけても哀れなり・二つや三つや四つ五つ・十（トオ）にもたらぬ嬰子（ミドリコ）が・賽の河原に集りて・父こひし母こひし・戀ひし戀ひしとなく聲は・此の世の聲とは事かはり・悲（カナ）しさ骨身（ホネミ）を通すなり・彼（ア）のみどり子の所作（ショサ）として・川原の石をとり集め・是れにて廻向（エカウ）の塔を組む・いちぢう（一重）くんでは父のため・にぢゆう（二重）くんでは母のため・さんぢゆう（三重）くんでは古里（フルサト）の・兄弟・我身（ワガミ）と廻向して・晝は獨りで遊べども・日も入あひの其のころは・地獄の鬼が現はれて・やれ汝等は何をする・娑婆に殘りし父（チチ）母（ハハ）は・追善（ツヒゼン）ざぜん（坐禪）の勸めなく・唯明け暮れに汝等の・形見（カタミ）の着類・手遊びの・太鼓や人形風（カザ）ぐるま・見るにつけても憐れなり・おやの歎げきは汝らが・苦患（クゲン）を受くる種となる・我を恨むること勿れと・くろがねの棒をのべ・積みたる塔をおし崩す・其のとき能化（ノウゲ）の地藏尊・動（ユル）ぎいでさせたまひつつ・汝等いのち短かくて・冥途のたびに來（キタ）るなり・娑婆と冥途は程遠し・我を冥途の父（チチ）母と・思ふて明け暮れたのめよと幼（オサナキ）ものを御衣（ミコロモ）の・裳（モスソ）の内にかきいれて・憐れみ給ふぞ有がたき・いまだ歩（アユ）まぬ嬰子（ミドリゴ）を・錫杖（シャクジャウ）の柄（ツカ）に取つかせ・忍辱（ニンニク）慈悲の御膚（ミハダ）へに・いだき抱（カカ）へ撫（ナデ）さすり・憐れみ給ふぞ有がたき（畢）

どうだい・こんなものは!!今の世に・まじめに歌ふ莫迦が・どこにあるか??恐らくはあるまい・然も坊さんの内には時（トキ）折（ヲリ）まだこんなものを眞面目くさつて話してきかせる・ものがある・のみならず・關東の大震火災後には「大震火災回向和讃」といふものが現はれた・作者は宇都宮市の植田竹堂といふ人だが・其の末節に至れば・相變はらず

老も若きも幼(オサナキ)も・死出の山路を辿(タド)りつつ

てなことを讀み込んで・おいたのである・今日の人間に死出の山路なんてことをいふてきかせて受け入れられると思ふか?? 作者の時代錯誤的思想にも呆れて物がいへぬが・紀念のため全文を左に記載して見せませう

歸命頂禮觀世音・あわれみ給へや諸人(モロビト)を・茲に大正十二とせ・癸亥九月の一日は・如何なる天魔の惡日ぞ・武藏相模(ムサシ・サガミ)に・伊豆阿房の・沿岸各地の一帶は・天日・俄かに物凄(スゴ)く・忽ち發(ヲコ)る震動に・あわやと思ふ遑まなく・ゆるぐ大地は一振(ヒトフリ)に家も財(タカラ)も樹も人も・鳥やけものの族(タグヒ)まで・安きものとて無かりける

中にも東京横濱は・猛燄諸所に・うづまきて・西も東も火の海と・漲(ミナギ)る中を幾萬の・救ひを叫ぶ老若が・右往左往に避(サ)け迷ふ・焦熱無間の苦るしみは實(ゲ)にや斯世の地獄なり

憐はれ我子を脊負ひつつ・又は抱(ダ)きつ手引きつつ・夫は妻をいたわりつつ・子は又親を救わんと・遂に骸(ムクロ)を棟(ムネ)の下・或ひは火の中(ナカ)水の中(ウチ)・互に擁(イダ)きかさなりて・屍(カバネ)の山を築きける

九死に一生得た人も・妻は夫に・子は親に・別れわかれて賴(タヨ)りなく・富も榮譽もなりはひも殘るは身・一つ己(ワレ)一つ・如何に常なき世とはいひ・昨日(キノフ)の淵は今日(ケフ)の瀬と・變る浮世ぞあわれなり(剛堂曰く・ここまでは當時の實況・其のままで彼れ是れと言ふべきところがないが)老(ロウ)も若きも幼なきも・死出の山路を辿(タド)りつつ・嘸ぞや名殘りの惜しからむ・風の朝(アシタ)も雨の夜も・涙と共に歩みゆく・十萬億土の旅の空・如何に寂(サビシ)くありぬらむ・いかに哀(カナ)しくありぬらむ・死出の山路の道知るべ・教へ給へや三途川(サンズガワ)お救(タス)け給へや諸人を・極樂淨土へ御手引(オンテビキ)蓮(ハス)の臺(ウテナ)に安樂の往生願ひ奉る

南無大慈大悲觀世音菩薩・願はくは此の功德に依て・一切の苦惱を去り・皆(ミナ)俱に佛道を成(ジャウ)ぜんことを(畢)

これが大震火災回向和讃といふものであるが・如何にも南無阿彌陀佛式で・我輩には・とても讀み切れなかつたのである・彼の上海事變の際・井上中尉の新ひ妻が「私は蓮のうてなの上にて・お待いたして居りまする」とかきおきして自害した悲劇の機緣などは確實(タシカ)に此の阿彌陀式の教說が其の由因をなしたものと思ふ・もちろん正成公や乃木大將の如く・又ベッテンコオフエル氏やエミエル・フイッシャアなどの如く意志決定の上で自害することは最も賞讃すべき美事であるから・社會成人教育の一面として奬勵すべきことであるが・彼(ア)の世の蓮華の上で永窮の生命を保つなんて料簡で自害した り首を縊つたり・なんかする樣な奴(ヤツ)の死骸は犬(イヌ)猫(ネコ)の屍骸同樣に葬つて懲戒する樣

な法律を刑法中に加ふるがよいのである

抑も靈魂といふものは科學的實驗的には今日尙未だ證明し得ざれども・依的兒分子よりも更に更に微細なものであることは心眼の上に於て能く認識し得らるるもので・此の靈魂卽ち我輩が震原子一名ヴイブラリオンと稱するものは幾百億萬年の昔しから存在し・又幾百億萬年の後までも存在するもので・言はば始めなく終りなき存在物で・此の震原子が一個處に停止すれば・そこに萬有が現はれて我々の感觸の對法となり震原子が萬有體から逸出し去れば萬有は崩解して死滅の現象を示現するので・それ以外に何等の不思議もなく天國や地獄・そんなものも此の世以外に決して有るものでないのである・況んや蓮の華なんてものが・此の世以外に・いかでか存在せん・井上中尉の妻君の如きは實に此の十萬億土の阿彌陀說に誤られたものといふべきで誠に憫然の至りにたえぬのである

〔十〕 佛教は葬式坊主の道具

同じ佛教のお經でも四十二章經だの佛遺教經だのといふものは短編で讀誦には十分時をも要さぬ程のもので誠に善いお經だ・殊に其のかいてあることは阿彌陀經や觀音經や不動經の如き・つまらぬものでなく・我々が聽いても尤もだと思はるるものであるから讀者に一讀を勸誘するが然し是等のお經は言はば訓戒的のものでちつとも有がたみはない・のみならず釋迦牟尼佛が此の世を去るときの遺言たる遺教經の如きは佛教の本音（ホンネ）を吐いたもので・徹頭徹尾・厭世的で・且つ禁欲的であるから・今日の社會には到底應用は出來ぬものである

今遺教經の內容を解剖してお目にかけませうか・淨戒を保持して佛道に入らんと欲するもは左記の諸項を守らねばならぬといふて其の條項が列示されてある曰く

（一）家屋や邸宅や屋敷を所有すべからず

（二）賣買貿易の事業を營むべからず

（三）下女や下男を使養すべからず

（四）況んや女・女房なんてものは絕對に遠離して蓄ふべからず

（五）若し色情の發作に苦るしまば須らく睪丸を切除し以て淫根を根絕すべし（四十二章經より補塡す）

（六）樹木花卉を栽培すべからず

（七）牛馬鷄豚家畜を飼養すべからず

（八）開拓土耕すべからず

（九）藥劑を調合すべからず

（十）吉凶禍福を占トすべからず

(十一)天體を觀測すべからず
(十二)曆數を計算すべからず
(十三)世事に參與すべからず
(十四)公使・領事の如き使命のために動くべからず
(十五)貴人富豪に交際すべからず
(十六)唯應さに端心・正念以て度(ド)を求むべし云云

とかいてある・諸君!!是れが御釋迦樣の御遺言でありますぞ・こんな御敎訓が守れるものですか・今日!!我我の如き俗人は假りに度外に措いて論ぜずとするも・佛敎で飯を食ふてゐるお寺樣はどうするか・日本國廣しといへども此の御遺言を守る坊さんが・どこに居りますか・肉食妻帶は天下晴れての免許・高野山でも信貴山でも乃至壺坂寺でも・すべて立派な旅館ぢやないか・越前の永平寺でも・京濱間の總持寺でも・乃至大雄山最乘寺あたりでも三千人の客膳を用意して「エレベエタ」附の立派な庖厨を建設して料理屋的營業を實行し・そして本堂では紫衣や緋のころもで勿體らしく讀經燒香を執り行ひ・內外上下相ひ呼應して愚夫愚婦を誑(タブラ)かし以て淨財喜捨の恩惠に浴すべく腐心してゐるではないか・そして釋迦如來の遺訓が完全に無視されてゐるではないか!!

我輩此の夏・吉野山の竹林院で晝飯を喫し信貴山の坊裡に一泊したが・全然旅館式であつたのに一驚を

喫したので成る程「反宗運動」の起るのも無理はないと感知したのである

抑も個樣な憤慨は古德も既に抱持してゐられた樣である・明治二十三年・永平寺の斷際禪師と總持寺の普蓋禪師とが共同で「曹洞敎會修證義」と題した佛徒の心得書の樣なものを印行されたのである・此の修證義なるものは(一)總序(二)懺悔滅罪(三)受戒入位(四)發願利生(五)行持報恩の五章より成りて佛敎を餘程當世化された樣に見られるものであるが・矢張り莊嚴を維持しなくては信者の信仰が薄くなるといふ危險に脅かされて・とうとう紫衣をも緋の衣をも一休和尙の如く脫(ヌ)ぎ棄てることが出來ずに往生されたが・佛敎の改良なんてことは愚夫愚婦の存在する限り困難なことであらう

其の後・巨匠ではないが布敎師として日淸戰爭にも從軍し又免囚の保護などにも力を致した所の坊さんに櫻井大典といふた人があつた此の人なども多少革新的意見を抱持してゐたが・顯著な功績を貽し得なかつたのである

それから又信州の上高井郡の小布施町あたりに葦澤義定といふた坊さんがゐた此の坊さんは大日本佛道敎會といふものを組織し

今や世の文明に伴ひ物質的科學敎育の隆昌に趣きつつあるは邦家の爲め洵に慶すべき現象たると共に社會の精神的敎化の一層緊要なるを感ぜずんばあらず

と唱道して敎育勅語に隨順した樣な佛敎的宗敎を建立せんと企圖し「佛道眞實經」なるもの十篇を作り

賛同の諸人に配布し其の意志希望の貫徹のため努力されたのは昭和二年の事であるが其の後・其の事業の進捗をば杏として聽かぬが・とにかく坊さんが此の方面に働らくので結局坊主臭くもなり・南無阿彌陀式に終始する故改良進歩は遂に望み得られぬのである

今の佛教は昔し已に評判された通り全然葬式佛教になつてゐて・ちつとも實社會の實用にはならぬのである・もちろん酒を飲むな・二枚舌を使ふな・妻以外の女に肉交するな・他人の物を盗み取る勿れ・なんていふ・所謂十戒の如きものは・佛教ばかりぢやない・どんな宗教を信ずるものにも有益な教訓であるこのみならず・我々の如き無佛無神論者にとりても洵に有益な教訓であるが・こんな教訓は蓋し宗教の要素とはならぬのである

然るに葬式や佛事法要に當り坊さんの讀誦するお經なるものはどんなものかといへば・前段・段々と說明した所の阿彌陀經や法華經や陀羅尼などの・一向に取るに足らぬものばかりなのであるから・如何に坊主が上手に節(フシ)をつけて讀み上げた所で聽衆には些の功能を與えずして唯だ痺(シビレ)を切らさしむるばかりなのである・況んや大日如來だ不動明王だ乃至觀音だ・阿彌陀なんで空想物を擔ぎ出してお說教するに於てをや

我輩は往年・岡本祖山といふ若僧と共同的に佛教弘通のための諸計畫を進めたことがあつた・其の際祖山和尙を勸めて棺桶の前では簡單にお經を讀み・直ちに尻を棺桶に振り向け・そして家族や會葬者に向つて物質不滅の原理や輪廻轉生の事實や阿賴耶・卽・靈魂なんてことを說教させたこともあつたが・餘りに突飛的であつたため思ふ樣に革新も出來ずに畢つたが我輩の三十一二歳の頃の意氣は正に斯くの如くであつたが・とにかく革新の遂げ得られなかつた一大原因は衣食に窮したことがそれであつたのである

思ふに醫者の樣に人を助けて直ぐ報酬を收得し得る樣な事業ならば・其の事業に誠意を盡せば・盡すに從つて收得も多くなりて益々勵みもついて來るが・悟道の話などは・幾ら話して聽かせても・三文の報酬にも有りつかぬのみならず・却つて此方(コチラ)を馬鹿にする樣な場合もありそして馬の耳に念佛の樣なことにも陷り易いので・とうとう宗教論は棚へ揚げてしまつたのである

我輩は自分の是等の經驗から考ひて見て葬式や法要のお布施で飯を食ふてゐる坊さんでは・例令へそれが斷際禪師や普蓋禪師の樣な高德な人であつても思ひ切つた宗教改革は困難であり又は爲し遂げられぬことであると信じてゐるのである・言ひかゆれば豐富な恒產もあり諸民の尊敬をも荷ふてゐる人・例令へば貴族の御隱居樣の如き御方が現はれて衆人を引導して下さらねば宗教改革は決して實現せぬものと信じてゐるのである・昨今又又「反宗運動」なんてことも起つて來てゐるが・是れとても返り咲きの花の樣なもので長つづきはせぬと信じてゐる(畢)

既成宗教撲滅論（中篇）

剛堂恩田重信著

〔一〕宗教心の起源

アウグスト・ウイルヘルム・フオン・シユレエゲルといふ人は宗教の人生に大切なものである事から

宗教は人的存在の根蔕である若しも人ありて宗教を否定するならば其の人は表面的で内在的の何物をも持たぬ人であらう（原文省略）

といふておいたが吾々の考へではゴットや阿彌陀さんを信仰する今迄の様な宗教を宗教とするならばそんなものは人間存在の根蔕でもなく基礎でもなく・なんでもないものだと言ひたいのである

山岡博士の其の宗教讀本には

宗教の存在は人間の宗教的要求に理由を發し人間完成に極まる・此が宗教の價値である・そして其の要求を自覺してゐると否との差こそあれ・宗教は總ての人の心の底に存するものである云

云・無自覺な現代人の中には「宗教は痴人の夢か老人の幻心・單なる氣休め的な迷信である」と否定するものもあるが實際宗教は其の樣なものでない・かかる言を以て宗教を否定する者こそ科學の迷信に陷つてゐるものである云云

とかへてあるが吾輩も或は科學の迷信に陷つてゐるのかも知れん・然し「ゴット」とか阿彌陀とか・有るか無いか・譯の判らん幽靈の如きものを持て來て・其れを信ぜよと言はれて見ても其れは・どうしても信仰しがたいのである・今日ではどうしても科學的・實驗的に討究して進まねば・すべてが駄目なのである

天業民報の某記者は嘗て

自己の宇宙觀や人生觀が・其れに依て確立しない樣な宗教なら・それはまだ其の人の眞（マコト）の宗教ではない・言ひかゆれば宇宙觀や人生觀が確立される樣な信仰でなければ眞實の宗教とは言はれない

と言ふておいたが此の意見は・やや吾が意を得たものであるが・爰に議論の焦點となるのは宇宙觀と人生觀とである・特に人生觀に就ては人々・各々・相異の意見を持つてゐるので到底一定しそうもない觀を呈してゐるから・此の記者の所說も實は出鱈目のものと言ふてよからう

抑も宗教心といふものは・どうして出來たものであるかといふに・其れは丁度五六年前阿蘇山の噴火口へ飛込んだところ途中に突掛かり・死ぬにや死なれず・あがるにや・上がられず・飲まず食はず・助けて呉れと叫びながら・三日目にロオプで引きあげられた・其の男の樣な場合に生ずるもので・苦痛もなく煩悶もない・平穩無事の空氣中に生息してゐる人間などには決して生するものでない・言ひかゆれば氣ばかり強くて然も思ふ樣にならぬといふ樣な場合に置かれた人間か・若しくは獨栖索居に耐えざる人間などに「神信心」なんていふ「おありがたごころ」が生ずるのである・此の故に學者の兎囚は大抵クリスチャンとなるか或は法華經信者になるか乃至は大本教・天理教などの信者になるのである・癩病患者が南無妙法蓮華經を唱ひたり・亭主に死なれ・意地のわるい伜の嫁に窘（イヂ）められる後家が御詠歌を歌ふたり・南無阿彌陀佛を唱ふる樣になるのは世間に幾らも見ることである・俗には「苦るしい時の神頼み」といふ說話があり・古い書物には「急則抱佛脚」といふ文句がある・いづれも心に違狀のある時に宗教心といふものが起るといふ證據になるといふ話しなのであるが之れに反し金錢を持ち過ぎた人間や食ふに困（コマ）らぬ人間や乃至時めく大官や成金・なり上（ア）がりなどには決して宗教心は起るものでない「エスキリスト」も既に「富める人に神の道の入りがたいのは丁度傘さして馬の鼻の孔か柱の節の孔へ這入らうとするほどに六つかしいものだ」と言ふて嘆息したぢやありませんか・約翰傳あたりを讀んで見れば直ぐわかる事だ・であるから宗教心といふものは普通一般・平平凡凡の人間には生ずるもので無いのである

然らば酉の市で熊手などを買つて來る樣な人間や團扇大鼓を叩きながらお題目を唱ひて池上あたりへ繰込む連中などは・どんなものかといふに實は彼等にも又一分の宗教心はあるが・其の宗教心は見榮坊から來たもので矢張り心の尋常平凡ならざるに基因してゐるのである・であるから神樣を信ずるとか・佛樣や不動樣を信仰するといふ樣な宗教心は人心の腐敗から生ずるもので丁度玉子が腐つて硫化水素臭を發するが如きもので決して山岡博士の言はれた如く心の根蔕に生れながらに存在してゐたものではないのである・言ひかゆれば人心に腐敗作用や醱酵作用が起り「お助け下さへ」と叫ぶ樣な人間のあるとき・氣轉の利（キ）いた人が現はれて慰安的に・注射藥的に・麻藥を掛けつつ

マア兎にかく神樣を御信仰なさへ・神樣にお縋がりするより外に仕方は有ません

と勸め或は

此の千本針は岐度彈丸（タマ）によけられます・しつかり肌につけて往きなさへ

と言はるれば本統に「さうか知らん」と思ひ茲に始めて宗教心といふものが起つて來るのである・であるから是れまでの宗教といふものは一種の慰安劑で腹痛（ハライタ）や胃痙攣（イケイレン）に鎭痛劑として皮下に注射する「モルヒネ」の如きものである・であるから佛者はいづれも

我・衆生の苦を見るに忍びず・これを救はんがため・機根に應じ此の甘露の妙法を說くのである

と說いてゐる「隨機說法・應病與藥」の語は此の義から生れたのである・從つて病氣の無い者に醫藥の用なきが如く苦惱もなく煩悶もない人間に對してはお釋迦樣のお說敎もエスキリストのお談義も瓦石同樣で猫に古判よりも・まつとつまらぬものなのである

〔二〕宗敎の用無用に就て

宗敎は普通一般の人に有用か無用かとらふに其れは場合によるのである・人間の數が少なくて衣食が豐富で然も天災地殃・有爲轉變の發動せぬ樣な・言はば堯舜時代・無爲にして治まるといふ樣な場合には宗敎なんてものは全然無用であるが・人間が多くなり衣食に不足を告げて來て・互に喧嘩や鬪爭を爲（ス）る樣になつた場合には其の慘劇を豫防し或は緩和するため・消極方面から宗敎といふものが有用となり積極方面から倫理とか法律とか乃至一般敎育なんてものが無くてならぬものとなつたのである動物界では所謂る自然淘汰の法則で優勢なものが・はびこり劣勢なものが段々に退却して自然の釣合ひを保持する樣に成つてゆくが人間社會では左樣な譯けにはゆかぬ故・昔しから聖人とか仁者とか言ふ人が現はれて喧嘩や殺伐なんていふ直接な行動を取締るために一方では法律といふものを作つて以て惡事や非事を防ぎ一方では人情から割出した所の仁義とか禮讓なんて事を說いて・いづれも仲善く暮ちさせべく考慮した・其れが敎訓であり法令であり且つ宗敎なのであるから昔の書物にも

天の命・これを性といふ

性に率ふ・これを道といふ
道を修むる・これを敎えといふ

とかいてあり・人たるべき當然の行儀作法を定めて・以て其れを禮と名づけ人に履行させべく强ひたのである・周公が禮經を制したのは全く此の意志から出たものである・卽ち大にしては冠婚喪祭の作法から小にしては視聽言動の態度姿勢までを規定したのである蓋し動物的行爲を防止し以て人間社會に悲風慘雨なからしめんとの聖慮に出でたるものに外ならぬのである・卽ち釋迦の敎えも基督の敎えも乃至老子の說いた所もゾクラテスの說いた所もいづれも皆人間社會に悲風慘雨なからしめんとの誠意とか慈悲心とかの發動に外ならぬものである・であるから今日でも宗敎を云云する場合には必ず社會の「無爭」を基礎として說話を進めなければならぬのである

但したとへ社會の無爭を基礎とし目的としても其の說く所の根底に「ゴット」とか如來樣とか乃至阿彌陀樣なんて・科學的知識の進步した今日の人間の理想に反する・言はば無稽なものを擔ぎ込んで智識の不十分なものを迷信に引込むのは甚だ宜しくない・そして其れを利用して・財寶を捲き揚げ・そして其れで榮華な生活を送るのは甚だ以て宜しくないことである

〔三〕 妄想分別の効果

或る書物に

宇宙間の或る無限絕對のものを想像し(想像しの語に注意せよ)其れを畏敬し信仰し臣事し以て已れに安心立命を得ようとする・其れが宗敎である

と書いてあつたが吾々には其の無限とか unendlich とか乃至絕對とか absolut とか言ふもの・其れ自體が頓と會得し得られぬのである・理知の進んだ人間と言はれてゐる西洋人中には往々無窮だ無限だ永遠だなんて言葉を用ゆるものが有る樣だが吾々は其の人間の理知をいつも怪んでゐるのである抑も知識といふものは事物の全體を認識せざる限り其の判斷は決して確實性を具有せぬ筈のものである例令へば針の先きの如き尖(トガ)つた物があつても其の全體を見ない限り其れが縫針であるか・揉錐(モミギリ)であるか乃至正宗の刀(カタナ)であるか關ヶ原の七本鎗であるか・決して判斷がつくものでない

是れと同じ理窟で無限とか無窮とか乃至絕對なんて・區切りのないものは想像し得られぬ筈のものである

大哲人イマヌエル・カントは其の純粹理性批判の卷頭に於て早く既に

時間 Zeit と空間 Raum とは共に無限のものである

といふておいたが區切りの有るか無いか・判らぬものを・よくも無限なものだと斷言し得たぢやない

か??吾々は個様な無法の判斷を獨斷と稱するのである

然らば時間空間は無いものかといふに吾々は其れに對して有るとも言はず無いとも言はぬのである否

否・强へて言へば其れは人間の心裡の妄念であると答ふるのである

抑も吾々は松の樹を見て松といふ名をつけ・梅の樹を見て梅といふ名をつけてゐるが實際は松も梅も

唯名目ばかりのもので永久不變な實在物で無いのである何んとなれば根や幹や枝や葉の形狀の相違だ

けで或は松と呼び或は梅と呼ぶに過ぎぬからである・見玉へ・杯も茶碗も皿も鉢も其の質は全然同一で

只其の形の大小形狀により其の名を異（コト）にしてゐるではないか・此の意味から見て天地萬有は只

名目ばかりで其の根元は皆同一であると信じてゐる・此の確信は是れを名づけて天地一元論と稱する

のである・從つて人知さへ進めば亞鉛を銀にすることも出來・銅を黃金に變ずることも出來ると信じて

ゐるのである

是れと同じ理窟で吾々は時間や空間の如きものも・皆人間の妄想物で「有るもの」でもなく又「無いも

の」でもないと思ふてゐるのである・卽ち太陽が東から昇り西に沒する其の現象の移り易（カハ）る樣子

を見て人間が妄想して時間といふ名目を製造したので心裡內には有るかも知れんが天地の間には・ど

こを搜して見ても時間といふ物が發見されないぢやないか??空間だつて其の通りである・吾々が身體

を前後左右に動かして見た・其の時に其の人間が妄想分別して・動くには動き得るだけの空間が無くて

はならんと考へて・さては空間といふ樣な名目を製造したので・心裡內には有るかも知れんが天地の間

には・どこを搜して見ても空間といふ物が發見されないぢやないか??

世の中の事物は皆こんな具合で出來てゐるもので或は形狀の相違によりて柱とか丸太なんて名目が製

造され或は色彩の相違によりて更紗形とか・小紋形とか乃至友禪摸樣なんて名目が製造されるのであ

る・見玉へ・赤坊を・彼れにも欲心がある・川柳に

片乳（カタチチ）を・握るが欲の・始めなり

とある・確かに心がある・然も彼には時間もなく空間もなく・松もなく梅もなく・うつくしいものもなく

みにくいものもないぢやないか??此の無念無想の者が小學校へゆき・色々な名目や說話を注（ツ）ぎ込

まれ・其れが段段に昂じて遂には目にも見えず手にも觸れない種種の名目を覺えて・さてはゴットもあ

り・サタンもあり乃至佛樣もあり如來樣もあるものだと早呑み込みに呑み込んで仕まつたのが今日の

吾々であるのである・思へば敎育程吾々を邪道へ誘惑して吾々を苦るしめたものは他にあるまい・然も

理性に依て逆（ギャク）に推考して見ると・これまで「有る」と思つたものは殘らず空虛で一つも確實性

の具はつた物の無い事が明瞭し・そして「つまらぬ事に精力を費ひやしたものであつた哩」といふ樣な

嘆聲を發せざるを得ぬ事になりて・恨めしくならざるを得ぬのである・見玉へ杯でも茶碗でも皿でも鉢

でも土といふものを離れてどこに其の本體があるか・結局は形狀色澤の相違に依てつけた空名に過ぎ

ぬぢやないか??見玉へ生物を!!生れて食ふて・大きくなつて・子供を作つて・そして死んで滅するぢやないか・人間も亦其の通りである・然るに猫や犬の世界には「ゴット」もなければ阿彌陀もない・皿もなければ鉢もない・そんなもののあるのは人間はかりである・蓋し犬や猫には妄想分別といふものがないに反し・人間には妄想分別があるから種種の妄念を揑造し遂にゴットだホトケだ・なんてものを現出せしめたのである・故に吾々はゴットだ佛だサタンだ惡鬼なんてものは殘らず妄想分別の產物だといふのである・のみならず美醜善惡正邪是非なんてことも實際には確實性が具はつてゐないものとしてゐるのである・例令へば美醜といふことで考へて見玉へ!!結局は形狀色彩等の上の相違に過ぎぬので物・それ自體には美醜の相違はないぢやないか??同じ鯛にも眞鯛（マダヒ）と瘤鯛（コブダヒ）とがある・眞鯛が美であり瘤鯛が醜であるとは容易に斷言することは出來ない・見樣によりては瘤鯛の方が遙かに美くしく感じられるのである・であるから美醜・善惡なんてことは見る人の判斷に依るだけのことで天地の間には美もなく醜もなく・善もなく惡もない事を覺了せねばならぬのである・要は人間の行動を整理するために時間だ空間だ大小長短だ善惡美醜だ・是だ非だ正だ邪だなんて名目を設けたのである・言ひかゆれば軍旗を高く押し立て聯隊の兵士の向ふ所を標示するが如きものである・個樣な事が正である・吾々同胞は一致團結して殘らず此の善と正とに向つて進まうではないかと・人類の歸趣を標示して進まんとするとき・ゴットだとか神だとか乃至は人道だとか正義なんて名目が必要なのである・言ひかゆれば人心を一致せしめ其の間に爭鬪の如き忌はしき事の起らざらしめんがためにゴットだ如來だ正義だ善行なんてことを說いて聽かせるのである・が・今日では科學的知識が進んで來たから・人心の歸向を一樣にするための道具にも・可及的科學的知識を取入れなければならんのである・從つてゴットだの阿彌陀なんて・非科學的なものを人心指導の材料に使用しては決して十分の効果が擧るべきでない・個樣な意味から見ても既成の宗教は遠からず滅亡すべき運命を持てゐると思はるるのである

〔四〕宗教の政治に於ける効果

宗教は人心の歸趣を一樣にする道具であると論じておいたが果して然りである男爵阪谷芳郎氏は嘗て帝國議會に宗教法案の上程されたとき

> 國體を維持し風教を維持する根幹は宗教の力であり宗教の力によりて今日の安寧秩序が保たれてゐる

と述べられたのである・宗教はたしかに國家統治の必要な道具に相違ないが然し支那上代の天子樣の如く禪宗にしろ淨土宗にしろ宗教を國家統治の道具以上に信用し自ら佛像の前に跪拜したり或は彌陀如來の慈悲說を眞面目に信じて・無闇に救助を求むる樣な惑溺狀態に陷つては・宗教は寧ろ有害なもの

となるのである・歴史を按するに一國の天子にして宗教に惑溺し・そして其の民を苦るしめ或は殘殺した例が少くない西洋の彼の十字軍などは宗教のために起つた惡戰爭の惡例の一つである・我が朝でも上御一人の佛教に耽溺されて御政事上に故障を貽された例がないでもない・常識で判斷しても・直ぐ判る様な事を眞（マ）に受け入れて夢中になる程・愚昧の心得は他に多くなからうと思ふ・小事ではあるが佛壇に佛像を安置して其の佛像に香華を供へるが加きは愚婦の行爲ではないか?? 近頃では西洋の風俗が渡來し・葬式場裡に一個貳拾圓參拾圓の花環などを供へるが如きは實に嗤笑すべき愚行にあらずやである・死者の靈は依然として此の天地の間に存在してゐる・其の靈に對し敬禮の誠を捧ぐれば・それで事は足るのである・天國へ昇るとか極樂へ往生するとか・なんとか言ふことは既成宗教を信ずる信者の迷信なのである・たとへ信教の自由が憲法で許されてあるにもせよ・正しき信仰を國民間に誘起するのは文教の衝に當る人々の責務ではないか??

殊に國體と宗教との關係は餘程愼重に考慮せねばならぬのであると思ふ儒教は宗教ぢやない様だが・それでも餘程注意を要すると思ふのである・仁義禮智信の教えは決して惡るいことではないが昔し徂徠先生時代に若し堯舜が日本へ攻めて來たらば・どうするか?? といふ問題さへも起つたといふことであるから・況んや宗教に於ては安寧秩序を害さねば何を信じても宜しいといふことで放任したらば或る場合にとんでもない間違ひが起らぬとは斷言出來ないのである・同じ佛教でも無闇に阿彌陀様を信仰する様な人間ばかりになつたとすると・餘國は兎にかく・我が日本國では餘程考ひねばならぬことだと思ふ・であるから爲政者は須らく熟慮すべきである

昭和四年三月十一日の瑞祥新聞には

宗教の目的は人に生活の眞意義・眞生命を得しむるにあり・換言すれば娑婆をして寂光淨土たらしめ地上に天國を現出せしめんが爲めに外ならぬ

とかいてあつたが是れが宗教の本當の目的であるかどうかは我輩の大いに疑ふ所であるのである・何んとなれば釋尊生れて已に今日まで二千五百年・基督生れて已に今日まで約二千年・そればかりでなく其の後・龍樹菩薩や馬鳴尊者・親鸞だ日蓮だ・なんて偉大な聖人や上人が必死となつて其の教法の弘通に努め又西洋ではアウグスチヌスやアンゼルムスの如き傑物が現はれ又ルウテルやツウイングリイの如き熱血男子が現はれて法のため・教のため血まで流して戰つたにも拘はらず今日まで未だ一回も此の地上に天國が出現もせず又一回も此の娑婆が寂光淨土に變じなかつたのであるからである・のみならず宗教上の喧嘩の結果或は油を注ぎて多くの人を燒き殺し或は軍刀を拔て兵士を指揮し無辜の民を塗炭に苦るしめた例が一再に止まらなかつたのであるではないか??

或る書物には

宗教上の爭ひは神學者間と言はず哲學者間と言はず否・一般の信者の間にも行はれ・そして血を

流すまで爭つた事が數限りなくあつた

と書いてあり・そして其の論爭や戰爭は他の論爭や戰爭よりも殘酷の程度が一層激烈であつたのである・此の如き事相は如何に之を說明すべきか??これでも地上に天國が造られたと言ひ得るか??これでも寂光淨土を娑婆に出現せしめたと言ひ得るか??疑はざるを得ぬではないか??聞く所によればマルクス主義者の見解では「宗教は阿片の如きもので一種の有毒物だ」と言ふことであるが我輩はそれ程にまで過激には言ひたく無いが然し是れまでの宗教は人間を馬鹿にした樣な點を慥かに具えてゐたと思ふ否・子供の泣きを靜めるため甘味（ウマ）いものを澤山に與へて・其の子供の齒牙を齲齒にし・其れに因て消化不良を惹起し一種の病人たらしめた樣な趣きが慥かに見えてゐるのである・兎にかく是れまでの門徒宗だの・禪宗だの乃至洗禮派だのメソヂスト派だのといふ所謂る既成宗教なるものは之れを撲滅すべき素質を十分に具備してゐるものと思ふのである

〔五〕道德と宗教

哲人フイヒテは道德と宗教とは根本的に同じであらねばならぬと考へた人であり且つ

尋常な生活に於て・又秩序の行き屆いた社會に於ては生活を形成するためには全然直接に宗教（舊來の基督教のこと）の必要は無い寧ろ此の目的に對しては本當の禮儀正しきこと（與えられた食物を食ふて挨拶もせず謝辭も述べずに出てゆく・犬か猫の樣な無禮無作法等の無いこと）が之を達成する

と言ふてゐる・カアル・グスタフ・フオン・ブリングマンも亦

宗教を尊貴ならしむるものは神壇や（佛壇や）善い神や（如來樣など）ではなくて只父母のため・同胞のため・將た人類のために盡す所の犧牲に因て燃ゆる神聖な神火のみである

と述べ・大文豪ウォルフガング・フオン・ゲエテも亦

確信と服從とは善良な宗教の眞正な基礎で（天國へ往きたいとか・極樂へ往きたいとか・乃至此の世の苦痛から離脫したいなんて欲から割出した信仰や信心を除外しての基礎で）ある

と言ふてゐた吾々が父母の恩を確信し父母と（師長と）に服從し・そして人類のために報恩行（ホウヲンギャウ）を實行し・依つて以て自分自身の人生の目的を達し・人としての道を達成すること・これ程立派な行爲は他には決して見ることが出來ぬと吾々は確信してゐるのである

エアン・バウルは

宗教のある所では人間が愛せられ・そして動物も・又すべてのものも（一切のものが愛せられる）

と謳ふてゐた・父母の恩を思ひ・同胞の恩を思ひ・そして牛羊犬馬の恩をも思ふて見るがよい・然るときは愛の心は油然として起り來るであらう・父母を愛し・同胞を愛し・天を愛し・土地を愛し・一切萬有

を愛する様になるであらう・名づけて是れを博愛といふのである

若しも今日吾々の周圍に此の如き博愛の神火に燃える人ありとせば此の人は正に是れ現時の基督であり釋迦であり孔子であらう・天下を擧げて悉く博愛の人たらしむるのは眞正な宗教家の終極の目的ではないか??語に曰く任・重くして道・遠し・吾々は相ひ率ひて博愛道に進まねばならぬ

論語に

孝悌は・それ仁(博愛)をなすの本か

とかいてある・孝悌とは勞苦を厭はず又自我の我欲を征服しつつ善く父母に事へ又善く兄に事へることである・此の孝悌の道を盡し且つ推し弘めて以て四海に及ぼす人ありとせば此の人は博愛・以て衆に及ぼす人であり・仁を爲す人であり孔子でありキリストであるのである

文豪ゲエテは

人・各々已れより始むべし・先づ已れ自身をして幸福ならしむるを要す・それより遂に全社會の幸福・伴生するや疑ひなし

といひ・明治天皇の御製には

四方(ヨモ)の海・みなはらからと・いふからに
なに波風の・たちさわぐらむ

と仰せられたのがある・吾々が率先して此の大御心を奉體して・先づ父母のため一身を犧牲に供し次に兄弟姉妹のため一身を犧牲に供し・更に進んで一村一郡・一縣一府・一國より萬國民のため一身を犧牲に供したならば此の人は立派な仁者であらう・此の如き人は阿彌陀樣を拜せずゴットやエホバを信ぜずとも立派な君子人であらう・賢者であらう・若しも此の世界が此の如き君子人から滿されたりとせば此の世界は必ず安樂國となるべし

〔六〕宗教は拔苦與樂の藥劑

兎にかく既成の宗教は人間に苦勞や難義や心配があつて・それに人間が耐えかねて・さてどうしたらよからうと・煩悶し心配し苦勞する・其の人間を慰安するため・悧巧な人間があつて・思ひつき・工夫し・考へ出した藥劑そのものが宗教・レリジオン・Lerigion であるから・例令へば「神鳴りさんに・お臍とられますぞ・おべべ着なさへ」と賺(スカ)し瞞(ダマカ)しつつ子供に着物を着せ・そして風を引かせない樣にする・左樣な親切心から案出されたものが既成の宗教であるから・既成の宗教には神鳴樣に似た樣なものが必ず連繫してゐる・ゴット Gott だとか佛陀 Buddha (ブッドハ)だとか・觀世音菩薩 Avalokites'vara (アヴロオキテエシワラ)だとか藥師如來(梵語冗長なるにより省略す)なんてものが・それである・お救ひとか・お助けとか・乃至おふりかへなんて言葉が必ず附隨して・それで以て病者が救助され

ることになるのであるが・地震の説明に大きな鯰（ナマヅ）をとりいれて・其の動搖を原因とした時代はともかく・人知の進んだ今日・ゴットが天地萬有の創造主であるとか・西方十萬億土に極樂淨土があるとか・なんとかいふ樣な・お談義は寗早通用せぬ・ことである・思ふに禪宗の主義はゴットや阿彌陀で滿足の出來ぬ・言はば少し理智の進んだ人間を療治する荒療法であり・淨土宗や念佛宗は理智の幼稚な人間を救濟する慈善事業の如きものであらう・そこで今日は宗教改革が必要となり既成宗教の撲滅が必要となつたのである鎗や雉刀が廢（スタ）れて鐵砲や機關銃や魚形水雷が現はれ乘籠や人力車が廢れて自轉車や自動車や飛行機が現はれた樣に新らしい宗教も現はれて來なければならぬ筈である所で新奇なものが發明されても・それが人間の理智に合致し實用に適合しなければ決して發達もせず進歩もしないのが道理であるから苟も新奇なものを發明して・それを世に弘めんとするならば其の發明品は成るべく實用に適し風俗習慣に叶ふはもちろん・孝悌忠信の道に合致する樣に考案せねばならぬのである・大日本教の如きものやアイウエオ教の如きものや三角合理の日本神教の如きものや乃至近頃篦棒に信者の多くなつた金光教や天理教や大本教や人の道・生長の家なんてものでは所謂淫祠邪教で當世には害あつて益なきものとする

然らば宗教はどう改革したらよいかといふに・夫れはつとめて實際に適合する樣に改良するが肝要である要するに現在の知識や現在の科學的原理原則に相應し・そして其の信仰する事柄が實見的寫實的に證明することの出來る樣に改良せねばならぬのである乃ち幾ら釋迦や基督や其の他聖者や使徒などが言ひ貽したことでも・それが現在の科學的原理原則に適合せぬものならば其れは一種の骨董品か幼兒の翫弄物かで・浮世ばなれした人間か又は全くの愚夫か愚婦かには役（ヤク）にたつか知れんが物質文明の火の車にのせられて・危（アブナ）い世界を渡る人間には三文の價値だもなく・間に合はぬのである・今日の時勢では造物主なんてものや奇蹟なんてものやでは餘程馬鹿な人間でない限り有難くも思はず滿足もせぬのである・從つて是れから改良する新宗教の教理や教義や其れに用ゐる儀式なんてものも殘らず徹頭徹尾・實驗的に證明し得られる樣な確乎たる土臺の上に建立されたものでなくてはならぬのである

如何に儀式とはいひ・緋の衣（コロモ）を着（ツ）けて錦織（ニシキ）の烏帽子を被（ガブ）り白毛の拂子をかざし・袈裟を掛け曲彔に跨り・そして左右に二列又は三列に小僧大僧を並べ・其れ等に銅鑼・鐃鈸を打鳴らさしめ或は鐘・大鼓を叩いて・ドンガラン・ドンガラン・大騒ぎを仕出すのは餘り褒めたことではない

一體全體・死體を葬るといふことは宗教家の爲す仕事ぢやない・親戚知己朋友等が相集つて埋葬し・そこに墓標を建て埋葬地を明示しておけば・それで宜しいのである・若し何か讀みあげたいならばキリスト教徒が現在行ふてゐる樣に死者の履歴をかいて・それ（誄・ルヰ）を讀みあげれば・それで宜しいので

ある

英國の著述家エドマンド・バアク Edmund Burk (1729—1797)は

宗教は公民的社會の基礎であり・そして人的結合に於てのすべての幸福の源泉であり・そしてすべての慰藉の大源泉であると吾々は感じてゐる

といふたそうだが宗教がこんな意味のものならば・なにもわざわざゴットだの如來なんてものを擔ぎ出さなくてもよろしいぢやないか??社會教育とか公民教育とか乃至成人教育とかいふ・特殊な教育的施設に由り嚴格な法律と相俟つて公德の發揮を促進すれば・それで事は濟むのである・ウイルヘルム・ハインゼは「宇宙と其の結合とをより多く知れば知るだけ宗教は勝(スグ)れたものとなる」といふたそうだが・是れは一面の眞理を顯はしてゐると同時に科學的知識や哲學的知識が進歩すれば・すれだけ宗教に變動が起るといふことを暗示するのである

阿片からモルヒネを發見したのは今から百三四十年前のことである其の頃には化學的に考へて物質を有機化合體と無機化合體との二ッに區別し・そして其の無機化合體は人間の手で製造し得るが有機化合體は所謂る「生活力」なる一種不思議な力に因つて成生するもので人間の手では・とても作ることは出來ないものと信じてゐたのであるが・其の後・佛蘭西の大化學家ベルテロオが炭素を電極として電氣を水素瓦斯内で閃發せしめ・是れに因て有機化合體であるとされた所のアセチレン瓦斯を作り得たので生活力なんて・そんな魔力を否定する樣になつた・のみならず今日では人工的に集造し得ないものがあつても・夫れは人知の足りないだけで人知さへ進めば岐度集成し得らるるものであると確信する樣になつたのである・のみならず我輩は人間社會に一番大切なものとして尊重されてゐる所の黃金でさへも製造し得らるるものと信じてゐるのである銅の原子量は六三・五七で黃金の原子量は一九七・二であるから若し銅に强壓を加へつつ强寒に曝したならば其の密度が增加して金黃に變ずるものと我輩は信じてゐるのである

個樣な理窟であるから人知が進んで宇宙の構成も明瞭に知られ・そして

蛙は盥をかぶせて・其の上に大きな石を載せておいても一晩たてば必ず逃げ出て仕まう・不思議な動物だ

なんて愚にもつかぬ事をいふものも無くなれば自然にゴットだの如來だの・阿彌陀樣だの觀音樣だの乃至不動樣なんて揑造物をも全く信じなくなるに相違ない・文豪シルレルでさへも既に

私はどんな宗教を信仰致しませうか
あなたが私に指示されたものの内には
一つもありません・なぜ一つもないでせうか
所謂る宗教だからです(詩の一節)

と歌つたそうです・シルレルの歌つた其の眞意は・私には能く判りませんが兎にかく吾々から見ても今迄の所謂る宗教中には一つも宗教として信賴すべものを見出さぬのであります・のみならず現に僧籍にゐる人でさへ本當に心の底から彌陀や如來を信じてゐないのであります・其の證據は高野の山奥を觀察して見れば直ぐ知ることが出來るのであります・昔しの慈雲尊者は親切丁寧に十善法語を說いておいたぢやありませんか??今日の坊主で此の十戒を嚴格に守つてゐるものが・どこにありますか??釋尊の教誡を中心から信用するならば生臭さ坊主が高野の山に居る筈はないのであります佛遺教經には「少慾知足」の嚴訓が書いてあります・然も其の少欲知足を守る坊さんが今日どこに居りますか??獨逸のリヒテンベルグといふ人は

人は宗教のために甚だ好んで誹ひ・そして其の法規に從つて生活するを餘り好まぬといふことは・珍らしく無いではないか

と申しておきました・吾々も亦此のリヒテンベルグと同一の嘆聲を發せざるを得ぬのであります・名古屋の日暹寺や和歌浦の紀三井寺あたりの誹議や京都本願寺あたりの誹議を見て見れば思ひ半ばに過ぐることぢやありませんか??既成宗教は今此の如くであります・改革するか又は改良せねばならぬのであります

〔七〕陰府の國主

或る書物に

宗教の宗の字は宗家とか詩宗とか・いふときの其の宗の字と同じ文字で首位者の義であるから吾々の祖先中の有德者を選拔し・以て之を吾々の首位者となし・其れを手本として吾々が自分自身の品行を修め併せて同胞を勸誘し相率ひて以て社會の平和と安寧とを增進せしめんとする・

左樣な教育が宗教である

と書いてあつたが・是れも一理ある定義であるが・然し現在だけに限つた教えであるから宗教としては少々物足らぬ定義といはねばならぬ

所で西洋の Religion (宗教)といふ言葉はアウグスチヌスの說に依れば拉甸語の religare 卽ち結びつけるといふ文字から由來したものであるといふ所から多くの西洋人は宗教といふ言葉に

神と人とを結びつける・之れが宗教である

といふ樣な定義を與えてゐるのであるが・茲に起る問題は「神」Gott その物であるが・蓋し個樣な意味の宗教が科學的知識の進步發達した現代の知識階級に果して能く容れられるであらうか??先づそれが疑問であらねばならぬ

然らば其の所謂る神様とは・どんなものか??其の所謂るゴットといふものは・どんなものかといふに西洋人は說明して次の如く言ふてゐた曰く

ゴットといふ言葉が善(ゼン)卽ち gut といふ文字から由來したといふことは爭はれないことである此の故に「至善」といふ意味がゴットであり・すべての善が此の至善卽ち絕對善 das absolute Gut から生れ出づるものであるといふことになるのである

Gott kommt unstreitig her von gut, bedeutet also das Gute selbst im vollendeten Sinne, das absolute Gut, das Urgut, von dem alles anderweite Gut abhängt, gleichsam der Urquelle des Guten (Krug's Lexikon)

それ故に又本體の本體とか最高の善とか乃至完善至極な本體とかいふ言葉を以てゴットといふ言葉の意味が代表されてゐる云云

と個樣に說明されてゐるのでありますが・茲に考慮すべきことが一つある・夫れは善惡の惡でありますが善が神ならば惡はなんでありますか??そこで西洋人は善の神樣を耶和華(エホバ)Jehova(正字は Jahveh)と名づけ惡の神樣をサタン(惡魔・魔王)Satan(古名は Satanas)とかトエフエル(惡鬼)Teufel などと名づけて此の世界は善の神と惡の神との鬪爭から成り立てゐると說明し・そして惡の神の支配を受けるから此の世界に惡事が生じ人々が難儀もし・苦勞もし・悲慘な事にも立ち至ることになるのである・であるからお互に惡魔の支配から離れエホバの神の支配下に入り其の恩寵を受けて正しく明るく愉快に此の一生を送らうぢやないか??といふ具合に說いて此の世を救はんとしたのが卽ち基督敎の成立つた所以であるから基督敎が必ずしも善くないといふのぢやないがエホバとかサタンとか本體の判明しない幽靈の如きものを持て來てサタンの支配を受けるな・エホバの御敎えを守つて善事を行へませう・なんて微溫的な・否・子供だましの樣な事で人間を善道に引入れようとした所で科學的知識の進んだ今日の人間は決して左樣な子供だましの御說敎には乘つて來(ヨ)ないのである・況んや其の所謂るエホバだのサタンだの乃至ルシファ Luzifer なんてものが・どこにゐるやら・少しも判らぬに於てをや

或はそれは人々の心の中にあるものだといはんか??然らば其れは人々の想像の產物で所謂る想念に過ぎぬものぢやないか??想念なんてものは夢の如きもので愚夫愚婦ならば或は實際に有るものの如く思ふかも知れんが・科學的知識の發達した現代人からは決して承認されるものでない

第一おかしいぢやないか??西洋神話の神樣の名ルシファは獨逸語で是を譯して陰府の國主 Fürst der Finsterniss と稱してゐるが抑も此の陰府が判らんものぢやないか??

日本の古書などにもヨミノクニといふ言葉があつて其れに黃泉の國とか陰府・冥府なんて言葉が當はめられてあるが・是れは結局・暗い處といふことで・取りも直さず土の中といふことで寺院の墓地など

が冥府であり陰府であり同時にヨミノクニなのである・そんな處の國主であり王様であり・フイユルストである・其の様な神様が舊約全書の以賽亞書 Jesaia の第十四章第十二節あたりに書いてあるとすれば其の神様の値打も凡そ察し得べく・そして同時に Altes Testament (舊約全書) なんてものの埒なき御伽噺的のものであることが察しられるではないか??

荀子勸學篇には

蟦(ミミズ)は爪牙の利もなく筋骨の强もなくて・よく上りては埃土を食ひ下りては黄泉を飲むと書いてある・是れに依て考ふれば埋葬された人畜はいづれも蚯蚓の如く地下で黄色の泉水を飲んでゐるのかも知れん・こんな馬鹿氣だ說話を現代の青年達・果して能く是れを信用するか・どうか??

然らば「神之國」The Kingdom of God 卽ち天國はどこにあるか??是れとてもヨミノクニ同様・一つの想念か乃至妄念に過ぎぬのではないか??天國は光明な國である The world of light である・神を信仰して瞑目すれば必ず天國にゆき・そして

神と共に永久の生を保有するのであるから・神を信仰せよ・エスキリストに服從せよ・歸順せよ・そして正義の道を履めよ

と言ひ聽かせて惡事を防止し善事を行はしむる手段方便は決して惡るい事ぢやない・善い事には相違ないが知識の進步した現代の青年がよく之れを聽き入れるや否やが問題なのである

〔八〕 基督教の侵略利用

抑も神と人との結合がレリジオンであり宗教であるといふ様な解說は獨りアウグスチヌス Augustinus (353—430)が主張したばかりでなく羅馬の著述家ラクタンチウス Lucius Cölius Lactantius Firmianus も亦此の解說に賛意を表してゐたのであるから此の解說は一般普通の解說と見て宜しかるべし・であるから西洋の宗教には神・ゴット・Gott. Deus といふものが必ず伴ふてゐる・從つて西洋人の頭腦には生れながらにして「神」といふ思想が必ず存在してゐる・それは丁度日本人の頭腦に生れながらにして佛様とか阿彌陀様とか乃至如來様なんて思想が存在してゐるのと同じことである・個様な思想は子供に「お化け」とか幽靈とか乃至「神鳴様」なんていふ思想を持たしめる事と同様に甚だ善くないことである・是れがため人間がどの位・馬鹿にされてゐるか測り知れないのである・卽ち既成宗教を撲滅するには先づ第一に神ゴットの思想を撲滅し・それから次には佛様だの如來様だの乃至阿彌陀様なんてものの思想を撲滅せんければならず・それから同時に地獄極樂乃至天國なんていふ思想をも撲滅せんければならぬ・蓋し是等の思想はいづれも科學的知識の足らぬ人間が偶(タマタマ)世事の不思議なものに出會ひ・そして驚愕し畏怖した後・妄想分別によりて造り揚げたもので・お寺の天井に書き現はされた龍(リユウ)の如きものである・想像物で・夢中に見たものと同じものなのである

西洋の言葉にパアソニフイケエション Personifikation（人格化）といふのがある或る理想に人格品性などを取り交（マゼ）ることである・言はば彩色（サイシキ）を施すことである・雪達磨を造り・堅炭の缺けなどで・それに目や鼻や髯（ヒゲ）などをつけるが如きことである・天地間のいづれの處に行つて見ても・どんな研究の深い動物學者に訊問して見ても・龍なんてものは斷じて無い・蛇（ヘビ）や鰐（ワニ）や熊鷹の體相を取集めて作り揚げたものが卽ち龍であり雲龍であり水龍であるのである・結局は神（カミ）といふ一つの觀念に人間の品性の美良なものを取入れて色彩を美しくしたものがゴットを信ずる人々の腦裡に存する神なのである・結局は妄想分別の所產に過ぎぬのであるキリスト教徒は「神は全知全能で絕對的至善の本體である」なんてことを言ふてゐるが・是れが卽ち文句を以て理想卽ち彼等の妄想を描出したものなのである・丁度觀世音菩薩といふ空想物を作りあげて其の菩薩に澤山な功德を塗付け・そして人の弱身につけ込んで・それを信仰すべく勸進するが如きものである

世には實在せぬ動物「龍」を描いて・それで飯を食ふてゐる畫伯もあるが是等は人生に餘り多くの弊害を與えて居らぬが・實在せぬ神だ佛だ乃至極樂だ天國だなんてものを演說し・左もありそうに言ひふらして・それで飯を食ひ酒を飯み・女郎買ひなどしてゐる・左樣な惡たれ坊主や牧師の職業は我々人類社會に弊害を莫大に加へてゐる・個樣な職業は人智を大に啓發し漸次に社會から影を無くする樣にせんければならぬ

所で面白い事には其の僧侶や牧師が科學的知識の少し進步した人から神やゴットに就て質問を受けたとき・其の僧侶や牧師が言ひ合せた樣に窮することである・其の窮餘・遂に「神の存在の證明」といふ辨明書の樣なものを作製するに至つたのである・神の存在の證明・如何にも苦るしい證明ぢやないか・個樣な苦辛は近い頃に始まつた苦辛ではない基督が十字架にかけられて後二三百年頃から既に起つた苦辛なのであるが兎にかく・昔時は科學的知識が開進せざりしため・法皇なんて人達が人民の無智を利用しゴットなんてものを勿體らしく說いて聞かせ・其の歡喜心を挑發し・そしてお賽錢を捲揚げ淨財喜捨金なんてものを收納して榮華な夢を結び或は作戰計畫の衝突から十字軍なんて大騷動を引起し幾百千萬人の命までも取揚げたのである・其の他教義の異釋とか儀式の相違などに就ての紛爭諍議卽ち妄想分別の相違からの喧嘩や鬪爭は無量無數で遂には宗教裁判なんてものをも設け莫大な弊害を人類に與えたことは歷史の宗教改革 Reformation der Religion の一章を讀めば思ひ半ばに過ぐるものがあるのである・否な・近世に入りては・キリスト教を信奉する白人等が未開人種の知慧の足らざるに付込み・國土侵略の具に之を供用してゐるのである英米佛獨露等の諸國が神の道を傳えると稱しミッショナリイ（傳道師）を各地に派遣し・それ等の傳道師は其の滯在する處に於てミッションスクウル（神學校）なんてものを建て・以て民心を引寄せ・或は慈善病院・貧困者救護團なんてものを設立し・教會や寺院と共同的に活動し・一方では其の地・從來の思想民風を攪亂し・延いて以て其れを自國の國民性に同化せし

めんと計畫したのである・日本にも此の傳道宣傳に釣込まれて日曜・日曜にアアメンを唱ひ讃美歌を歌ひ所謂るバイブルを金科玉條となし・折角老後の用意として稼ぎ溜めたお金を教會に奉納してゐる人が現在三十萬人に達してゐるといふことである(統計年鑑)

それは兎もかく・妄想分別で造り揚げたゴットとか造物主とかいふものに跪坐し禮拜し以て已れの冥福を祈る程・それ程お目出たい人の多いにはあきれざるを得ぬのである

要するにゴットなんて妄想物は我が神國にありては矛盾撞着のもので・たとへ憲法で信教の自由が與えられてゐるにもせよ・よくよく知解(チゲ)的に理解せしめて・こんな物を信仰させぬ樣にするのが吾吾の義務ぢやないか??其れと同樣に阿彌陀樣や觀音樣や不動樣なんてものをも・必竟愚夫愚婦を欺瞞する一種の道具に過ぎないものだといふことをも知解的に理解せしむるが必要であるのである

〔九〕宗教は裝飾か

宗教は神と人とを結合させる道具であるといふことは既に前文に說いた通りであるが・さて其の神なるものが實在物であるか・どうかといふ問題は重大な問題で學者の研究を餘儀なくさせたものである

日本でも知慧の足らぬ老爺や老婆は今日尙阿彌陀樣や如來樣の實在を信じてお念佛を捧げてゐるが科學的知識の發達したものは・殆んど・信じて居らぬのである

西洋でも老爺や老婆こそは今日尙ゴットやエホバなんてものの實在を信じてゐるが科學知識の發達したものは殆んど信じて居らぬのである

日蓮は破他自立の戰法で他宗は念佛無間・禪天魔・眞言亡國・律國賊と高唱したが日蓮の一番大事なお經の法華經の中の觀世音菩薩なんてものも亦念佛宗の阿彌陀樣と何程の相違も無いぢやないか??

近頃の葬式といふものを見るに・其の樣子は一種の見桀坊を衒ふ道具の如く見えてゐて其の會葬者なるものも世間の思惑を恐れて寄集まれる者の如くである・碩學レッシングは

宗教はすべての人のための一粧飾であり・そして彼等のためには缺くべからざる粧飾であらねばならぬ

と云ふたそうだが・西洋でも粧飾となつた時代があつたかも知らん・今日の東京での葬式を見るとたしかに一粧飾である

佛蘭西の廓清哲學者ヴォルテエル François Marie Arou et de Voltaire (1694—1778) は其の著書倫理論 Essay über d. Sitten d. Völker 1756(獨逸譯)中に於て

此の浮世では到る處・惡を爲すために宗教に奉仕してゐるが然し宗教は一般に善を爲すために設けられたものだ

と書いてゐたそうだが此の言葉は日本の現狀にも當はまつてゐるのである・嘗て法王ナレキサンデ

ル六世は・宗教を利用してゐる坊主の横暴を憎くみて

いづれの宗教も惡るいものぢやないが然し最も愚鈍なものが最も善い

Jede Religion ist gut, aber die dummste ist die beste.

と申されたといふことであるが・此の意味から言へば成るべく流行しない宗教が一番善い宗教といふことになるのである・何んとなれば流行しない・例令へば黄蘗宗の如きものや更に法相宗(殆んど影を見せない)の如きものは惡を爲す分量が少ないからである

のみならず或る書物には

世間には七十二の宗教があるけれど其の半分は賤民のためのものだ

とかいてあり更に或る書物には

人・多く宗教に就て喧嘩するが然しすべてが金(ゲルド)のためだ

とかいてあつた・いづれも西洋の書物にかいてあつたのであるが・今日の我が國の宗門内の出來事にも此の諷刺語は當てはまる樣ではないか?? 要するに今の坊主や牧師は宗教を一つの職業として醫者と同じく飯米のために利用してゐるのであり・そして國民にとりては何の益する所もないのである・若し吾吾に用事ありとすれば遺骨を當分預かつて呉れたり・先祖の年忌法事に際し般若心經や千手陀羅尼でも唸(ウナ)つて呉れる位が關の山である・西洋だつて今日は大概此の程度になつてゐる

〔十〕神の存在の證明

西洋の或書物には神・ゴットが實際に存在してゐるものか?? そして其の神・ゴットの本體はどんなものであるか?? 乃至其の神が文字の由來が指示するが如く絶對善なものであるか?? などといふことに就ての疑問が左の如くかいてあかれた曰く

此の如き想念を深刻に規定し或は展開せねばならぬ事になると吾々は痛く當惑せざるを得ぬ

それ故に昔しの賢人は神とは何ぞやといふ問ひに答ふるを避け

又神の本體といふことに就ても頗る愚ろかしき思想を提供したのみならず・其のため激烈な論爭をも惹起したのである

蓋し神の本體なんてものが實際に有るか・どうかといふ問題は斯の道に於ける主要な問題であるのである

Sobald aber diese Idee näher bestimmt oder entwickelt werden soll, so geräth der menschliche Geist in die grösste Verlegenheit.

Daher darf man sich nicht wundern, wenn auf der einen Seite ein alter Weiser sich immerfort einen und wieder einen Tag Bedenkzeit ausbat, um die Frage: Was ist Gott? zu

beantworten, und wenn auf der andern Seite über das göttliche Wesen nicht nur die tollsten Einfälle vorgebrachte, sondern auch die heftigsten Streitigkeiten geführt werden.

Ist ein solches Wesen? Das ist wohl die Hauptfrage. (Krug's Lexikon)

云云見給へ??神ゴットの問題は仲仲な難問題であることを・基督敎の僧侶達は「神」といふものに就て必死となつて研究し明快な解說を發明すべく努力したのである・卽ち其の結果・とうとう「神の存在の證明」なんてことになつて・左の如き大略五ッの證明法を案出することになつたのである曰く

(一)本體論的證明

(二)宇宙論的證明

(三)物理神學的證明

(四)歷史的證明

(五)道德的證明

是等の證明法の解說は日本語で書いてある哲學辭典などに記載されてあるから茲には轉載を見合せるが・或る西洋人は是等の神の存在の證明法を評して

人間が其の理知に依て「神」を直接に知り或は直接に觀察するといふことは理由のない斷定であり・又妄斷であり・延ひては人間をして狂信に陷らしむる所以である

と言ふてゐたが・是れは道理ある批評と吾輩は思ふてゐる・のみならず吾輩は吾輩の心さへ・どんなものか判るものでないと思ふてゐる・況んや香もなく聲もなきものに於てをやぢやないか??

神の存在に就ての證明は前記の通り色々と論議されてあるが今茲には試にアンゼルムス Anselmus (1033—1109)の本體論的證明を揭げて參考に供し・そして其の蒙を啓いて見せませう・彼の證明に曰く

事物若し存在するならば(若しと假定したところに注意せよ・著者) それが依りて存在する絕對的・普遍的な存在がなければならぬ・この絕對的・普遍的な存在が卽ち神ゴットである・神は絕對に完全なもので・神に優(マサ)れる完全なものは考へることが出來ない・神の觀念の中には既に神の存在といふことが含まれてゐる・何となれば思想上にのみ存在するものよりも實際に存在するものの方が尙一層完全な實在であるからである・神が若し思想上にのみ存在するものならば神よりも更に優れるものが實在してゐなければならぬ筈である・然るに吾人は神よりも勝(スグ)れた實在を考ふることが出來ない・かるが故に神は吾人の思想上にのみ實在するものでなくて・絕對的の實在であると斷定するのである云云

これがアンゼルムスの神の存在の證明だが・此の證明は「事物が若し存在するならば」といふ假定から歸納したものであるから・容易に承認することは出來ぬものと言ふべきである

今此の論法で一言を費して見んか・女が若しもゐるとすれば其の女の凄かける倚子がなければならぬ

とも言ひ得るであらう・若し斯く言ひ得たとしても若し其の女が有るものか・無いものかが判然しなかつた場合には其の所依の倚子も亦有るか・無いかが判然せぬであらう

吾々の見解では一切の萬有は一ッとして實體ありとは思惟されないのである・茲に一冊の書物ありとせん・そして此の書物は儼然として存在する一物なりやと言ふに・吾々の見解では此の書物は一ッの空名で實體は無きものと觀るのである・何となれば紙を離れて別に書物なるものが存在せざるからである・然らば其の紙は實體を具ふるものなりやと言ふに吾々は此の紙も亦一ッの空名で實體は無きものと觀るのである・何となれば糊と纖維とを離れて別に紙なるものが存在せざるからである・然らば其の纖維や糊は實體を具ふるものなりやと言ふに吾々は此の纖維も糊も共に亦一ッの空名で實體は無きものと觀るものである・何となれば・炭素と酸素と水素とを離れて別に纖維なるものも・糊なるものも共に存在せざるからである

此の如く觀照すれば杯も茶碗も皿も鉢も一ッとして空名ならざるものはないのである・言ひかゆれば萬有は一切空名で實體は無いことになるのである・否・萬有ばかりぢやない・喜怒愛憎の如き心法も皆一ッの空名にして實體は無いものと觀るのであるから・從つて人心の中に存する神や佛は空名にして實體は無いものと斷言するのである

然るに有るか無いか一向に譯けの判らぬ事物を假りに有るものとして・其の事物所依のもの卽ち神ゴットなかるべからずと斷定するのは一種の獨斷で欺瞞的言辭と言はねばなるまい・人知の幼稚な時代には或は人耳にも入りたるなるべけれども・今日となりては唯一笑に附せらるるのみであらう

〔十二〕原罪

所で或るレキシコンに書いてある通り西洋の神なるものは理知の足りない人間が天地間の現象に不審を抱き・其れには何か原因が無くてはなるまいと自分の小さな心で邪推を起し「操り人形」でさへ操(アヤツ)るものが無くては踊らない況んや日月星辰の大なるものが規則正しく動いてゐるには其の之れを動かす原因が無くてはならん・必ず有るに相違ないといふ樣な妄想分別を起した結果・遂にゴットとか造物主とかいふものを想像し其の想像物に摩訶般若の偉大な智慧でも有るかの如く想像し又此の浮世に時折り起り來る意外な出來事に眩惑し・そして其の出來事にも亦原因無かるべからずと妄想し・そして其れが又此のゴットの仕業(シワザ)なるべしと妄想し・かくて此のゴットを以て天地萬物の一大原因なりと推定し・そして適ま意外の不幸に遭遇するや悲鳴を揚げて其の不幸から逃避せんとして逃避し能はざるに當り・止むを得ず思ひかへして

神は萬物の父なりゴットは天地の母なり・天地萬物の父母たるもの豈に無意味に吾々を苦るしめんや艱難・汝を玉にするといふ・吾を玉成するための好意なるべし・愼んで神慮に順ふべきな

り

とあきらめて・然も神慮の緩和を謀るため跪坐禮拜して遂に

アア・天にまします神よ・弱きものを救ひ給へ・吾々を助け給へ・アアメン

などと泣言を並べる・之を稱して信仰の篤き人といふ・或は篤信の人なるべし然も個樣な無智な老若男女を寺院や教會に呼集めて・親切らしく神の道を說いて・そしてお賽錢を喜捨せしめ・そして共れに依て衣食してゆくのが西洋の坊主であり左樣な儀式が西洋の宗教なのである・氣の毒なものは信徒であり・罪の上塗りするものは坊主である・彼等は來世生れ代つて來たとき・必ず現在よりも・まつと惡るい根性の人間となつて現はれるのである・世界人類の道德の退步するは是れがためである

抑も基督教での一大爭議の原因となつてゐるものは原罪といふことである此の原罪なるものは・人間の心に生れながに天賦された罪惡の原因で・世間一切の罪惡は殘らず此の心の原罪に因りて起るものだとするのである原罪は英語で original sin といひ獨逸語で Ursunde といふてゐる・人類の祖アダムとエヴとの墮落に由て人類固有の遺傳となつた罪業であり・これがため人類が生れながら・すべて罪惡を犯すべき傾向を持てゐると說く・之れが卽ち原罪說なのである

此の原罪說の最も有力なる主唱者は昔しではアウグスチヌス Augustius(323—430)であり現在では吾が救世軍の山室軍平君などが其れである・其の說に曰く

基督の宗教は萬人を皆神の前に罪人と認むる宗教である・心の底まで看破り給ふ神の前には私共は殘らず皆罪人である・良心に咎めらるる事のみ行ふて來たのである・それ故に亦基督の血に洗はれて其の罪より救はるべき必要がある（山室軍平氏著基督教と日本人・から）

此の山室氏のお說はアウグスチヌスの說いた所のものを踏襲されたに過ぎぬのであるが・抑も此のアウグスチヌスといふ人は素行の格外に修まらなかつた人であつたが・伊太利ミラノの聖アンブロジウス Der Heilige Ambrosius, 340—397 の說教に動かされて飜然其の非行を改め・頗る熱心な基督信者になつた人で・此の人の原罪論は名高いものであつたそうだが其の說に依れば

人間は罪深き者である・救濟を要するものであるが・吾人を此の罪より救濟し得るものは唯エス・キリストあるのみである

といふべきものなそうだ・が・此の考ひから更に

罪は深く人性の根柢に存するものであり・從つて・自力の精進によりては人間は毫も善を爲し得ない

と說いたのであるから・從つて

人間は純他力によらなければ・救はれない

と說いたのである・此の他力主義の所說は・吾が淨土宗のお說教によく似てゐるのである

成る程吾々は良心に愧づる様なことを常(ツネ)平生に繰りかへし爲(シ)てゐるから其の點から言へば誠にお耻かしい事であり・それが爲め天國へも往かれず五障の雲に覆はれて梵天王や佛身にも成れず又貪瞋癡慢疑の五蓋の欲に誘引(サソ)はれて・いつも・六道に彷徨して浮ばれず・遺憾に耐えなく思ふては・ゐるが然しエデンの花園で林檎を食ふた・それが原因となり・遺傳となり遂に原罪といふ樣な・切つても切れぬ樣な前科者となつてゐるなどといふ・左樣な子供瞞しの樣な論說で吾々の惡事の原因を說明せんとする事には・我輩はどうしても感服が出來ぬのである・のみならず・昔しの西洋の坊さんの中にも已に我輩と同樣・原罪說に反對した人がある・例令へば英國の僧ペラギウス Peragius (西曆五世紀頃の人) の如きが其れである・のみならず其の學說を信ずる人が澤山あつて・其の人々が一般にペラギウス黨 Peragianer と呼ばれ・其れがための爭議が原罪爭議 Origenistische Streitigkeiten などと言はれる樣になつてゐるのである

吾々はペラギウス及び其の派の人々の所說がどの程度まで進められてゐたかは・承知せぬが・兎にかく我々の考ふる所に依れば惡事を爲す原因は獨り人間ばかりに存在するのでなく・あらゆる生物に殘らず存在してゐるといふべきである・見よ他の生物を・一切の生物には他の生物を傷害せんとする傾向が儼存してゐるではないか?? 雀は蟲を食ひ猫は鼠を食ひ蛇は蛙を食ひ雉子は蛇を食ひ・そして鯨は鰯を莫大に食ひ殺してゐるにあらずや・蓋し此の傾向は生物の生存慾から起つて來たもので生物に當然な傾向といふべきである・言ひかゆれば生物にして若しも衣食生に缺くる所がなく又同時に性慾の滿足に缺くる所なかりせば生物には一切惡事といふものが生起せぬ筈である

蓋し生物に惡事の生起する所以は生物本具の生存競爭性と生殖競爭性との・此の二つの本性の結果であるから二つの競爭を皆無ならしむれば・從つて生物界の惡事も亦皆無となるべき筈である・であるから吾々は

エデン Eden の花園で人祖が禁じられてあつた林檎を食ふたために其の罪が人間に遺傳し・其れに因て人間が惡事をなすのである

なんて講釋は子供瞞ましと言はねば・ならぬといふのである

生物には生存慾と生殖慾とが附纏ふてゐるから・此の慾のため・生物界に・どうしても競爭が起り・そして遂には掠奪だ强姦だ・人殺しなんて大惡事が起つて來るのである

吾輩は思ふのである・若しも人間に原罪なんてものが有りとすれば夫れはゴットの不覺から起つた事であるからゴットを恨み殺して仕まうべきだと・個樣に考ひてゐるのである・否・ゴットこそ後悔するが當然ぢやないか?? 吾々としては必要に應じ當然爲すべきことを爲し言ふべきことを言ふてゐるのである・見よ猫は鼠を捕つて其の生肉を食ひ・鷹は雀を捕つて又其の生肉を食ふてゐるではないか?? 鷹や猫の此の如き行爲は惡事でも又善事でもない・卽ち當然な行爲で改むる必要もなく・悔ゆる必要もない

のである・然し人間社會にこんな殘忍な殺伐行爲を許すときは・とても此の社會は安全に成立するものなでい・言ひかゆれば生存競爭や・生殖競爭を勝手氣儘に行ふべく許すときは所謂る强食弱肉の弊害が忽ち生起して悲慘事が續發して人間世界が地獄の沙汰となるから・そこで聖人は此の弊害を防止するため

父子親あり君臣義あり夫婦別あり長幼序あり朋友信あり

なんていふ所謂る五倫五常の教なるものを制定し釋尊は苦集滅道の四諦の理を說かれ五戒十戒等の戒律を設け色々と防非止惡の道を講じられたのであり・エス・キリストも社會改良のため博愛を說き正しき道を說えて教えられたのである・但し其の方便手段として阿彌陀樣も說かれ天地創造の神も說かれたのであるが・當時の人知が幼稚であつたため・天國とか極樂とか・淨土なんてものをも說かれ・地獄なんてものをも說かれたのであるが・今日其れを其のまま說いたのでは所謂時代錯誤と言はざるを得ないのである

此の故に我輩は原罪を基督の血をもて洗ふなんてことを言ふことを止(ヤ)めて・人々にまつと・まつと・共同責任意識を呼び起し・其れに因て社會に惡事の流行せぬ樣にし・場合によりては法律を以て嚴重に取締る樣な方法をも考慮し・又苦境に沈淪したものの心をも慰安する道を講じ共存共榮の道を布及せしめ同時に國費を以て人倫五常の道や四恩の道理などを說いて聽かせ・其の之れを善く實行したものにはメタルでも與え所謂勸善懲惡的政治を行ひ以て此の社會を極樂淨土たらしめる樣に心掛けることが最上乘の法と考ひるのであり・同時に理窟にも合致せぬ樣なゴットとか原罪とか乃至阿彌陀とか如來とかいふものを說いて聽かせることを止(ヤ)めさせる樣にせんければならぬと思ふてゐるのである・要は說く人も・其れを聽く人も・まつと科學的知識の進むことが必要であると思ふのである

世に淫祠邪教なんてもののあるのは・必竟人知が幼稚なるがためである但し他人に害を及ぼさず社會の安寧秩序を亂さぬ限り・どんなことを信仰するとも・其れは帝國憲法の許す處であるから・其れは止むを得ぬこととすべきである(畢)

既成教宗撲滅論（下篇）

剛堂恩田重信著

〔一〕心は現象なり

古歌に・心とは・いかなるものと・いふならば・墨繪にかきし・松風の音・といふのがある・一休和尚の作だともいはれてゐるが・そんなことは・どうでもよろしい・古歌の意（ココロ）は・心といふものは・フランスの哲人デカアトの言ふた樣に・たしかに存在してゐるものでは無くて・音色の如きものだが・それも繪にかいた松の樹に風の吹き當りて鳴る音（ヲト）の如きもので・有るとも言はれず・無いとも言はれぬものだと謂ふ義である・が・普通の人は・心とか精神とか乃至靈魂なんてものが・必ず存在してゐるものの如くに思ふてゐる樣だ是れが抑も人間に苦痛を招來する所以であり・延いては人間社會に喧嘩や鬪爭や其他色々樣々の慘風悲雨を招來する所以となるのであるから・天下泰平を希望する經世家は・色々な施設と共に・心とか靈魂とかいふものに就ての知識を民衆に洽ねく宣布する樣・取計ふが第一義で

あると思ふ

吾輩は「心は現象なり」と斷言してゐる・現象は獨逸語でエルシャイヌングといひ英語でフエノメノンといひギリシャ語では之をファイノメノン phainomēnon と呼んでゐるが此のギリシャ語は「見える様になる」といふ字義であるから眞暗な處に置かれた白金線が・電氣の流れによりて熱(アツ)くなり赤(アカ)くなり・光(ヒカリ)を發して我々の目に見ゆる様になる・是れが卽ちファイノメノンでありフエノメノンであるのである・人間の心といふものは・人體中に震原子と稱する極微(ゴクミ)又は隣虛塵が絕大な速度で運動するときに發起する現象なのである・そして人の心の人々各個に相異する所以は・震原子の運動の速度の相異に因るものであると・吾々は解說してゐるのであり・そして人の死ぬといふことは・震原子が肉體から離脫することであり・睡眠は震原子の運動の速度が低減するに因るものと吾々は解說してゐるのである・此の故に震原子の運動せざるものには震原子が有つても心といふ現象も無く生活といふ現象も無い・そして震原子が離脫すれば・どんなものでも悉く解體し崩壞して空無となる筈である・佛書「俱舍論」中には「本無今有・有壞還無」といふ語があり・そして法相宗の坊さんは「生住異滅」などと說いてゐる・昔し無つたものが生れて此の世に現はれ・そして此の世にながらえてゐる間に段々老弱となり・終に死んで其の體相・絕無となる・是れが生住異滅の四相と言はれてゐる現象なのである・言ひかゆれば天地萬有・有形無形を問はず・生住異滅の法則に從つて生滅を繰りかへしてゐるのである・然も其の根本原因は震原子である

抑も震原子は無始無終に大空間中に飛翔しつつ存在する微分子で古人は之を極微・隣虛塵などと稱したが・名實相叶はざる處あるにより剛堂は新規に震原子と名づけたのである蓋し此の微分子たるや野球戲に於て投げられた球子の如く・若しくは擊ち出された砲彈の如く微妙不可思議な震動と速度と性能とを具有し居り・そして天地間に永遠無窮に飛翔してゐるものであるが・其のたまたま停止するや靈氣・其の周圍に集合して・茲に萬物の原形體を構成し・此の原形體の發育增長したものが一切の生物なのである・菓子屋に金平糖といふものがある・罌粟(ケシ)の小さな種子を種(タネ)として・それに砂糖水をふりかけつつ砂糖を塗りつけて造り上げたものがそれである・震原子が生物の雄性生殖機關內に到着して茲に停止すれば・靈氣がそれに密着して精蟲となり活動するが其の精蟲は金平糖の微細なものと思へば間違ひのない觀察であり・そして其の精蟲が雌性生殖器內に於て段々增長したものが胎兒であり胚珠であり・そしてそれが完成されて此の世に出たものが・所謂る生物なのであり・そして其生物體內で震原子が運動してゐる間・吾々は其の生物を指して有生生物・又は生活生物・又は活動生物と名づけてゐるのである

震原子に天賦されてゐる勢力には二種の大區別がある・其の一種は之れを陽性勢力と名づけ他の一種は之れを陰性勢力と名づくるが・此の陰陽勢力の方向は互に十字形をなして九十度の角をなして交錯

してゐるもので陽が陰に剋(カ)てば雄性となり男性となり・陰が陽に剋(カ)てば雌性となり牝性となるのである・故に曰く萬有は陰陽二氣の交替(カウタイ)によりて成れるものなりと

電氣には陰電氣と陽電氣との二種を區別するが・性質には差異がない丁度貨幣の如きもので・質には相異なくて・借金と貸金との相異の如き關係をなしてゐるので・其の借金の方を赤字といひ貸金の方を黑字といふ樣なもので紙に裏と表のある如く柱に上端と下端とのある如く世界に山と谷とのある如きものなのである・紙の裏の方から見れば裏が表で表が裏の如き關係をなしてゐる・これが陰陽の關係なのである・山と谷とは反對の如く見ゆるが地球の裏から見て見玉へ谷は山で山は谷ぢやないか??然し吾々が普通に裏といひ表といひ・山といひ谷といふのは・俗眼から見たところの話しであり、從つて男といひ女といふも亦俗眼から見たところの區別に過ぎぬのである・言ひかゆれば電氣の陰陽・消積の區別は凸面鏡と凹面鏡との如き相異で此の二つの鏡を組合すれば鏡の作用が消滅する如く・陰と陽との二つの電氣を混合すれば電氣的作用も亦消滅するのであると同じく同量の女性と男性とを組合するときも亦中和して男らしい處も無くなり女らしい處も無くなるのである是れを男女和合の圓滿相と稱するのであり世相皆空・諸法皆空・人我皆空などと稱するのである

蓋し萬有に引力あるも是れがためであり生物に男女雌雄・相愛の力性あるも是れがためである・天地に陰陽の二氣が交流せざるときは・天地は空々漠々神(カミ)として見るべきものもなく・物として見るべきものもなく・其の他風雨寒暑の交替もなく山もなく谷もなく川もなく海もなく乃至王侯もなく賤民なく・富もなく貧もなく强健もなく病弱もなく・此の世界は極めて索然たるものとなるのである

抑も電氣の流動する所以は水の低きに流るるが如く・電位に高低の差あるに因るものとする・土地に高低なければ水は流れざるべし・電位に高低あり乃ち電氣流動して・車臺を走らし機翎を飛ばし・そして言語を通達し意志を發送し・夜はネオンサインで以て都市を不夜城化するのである・此の方面から考察すれば電氣に陰陽の差異ある・洵に以て喜ぶべく賀すべしといへども人間に陰陽男女の相異あるにより・爲めに淫慾色情なんてものが現はれ其れがため戀ひの敵(カタキ)失戀の恨み・相愛心中なんて慘劇悲劇の起るのは餘りにも望ましひことではないのである

蓋し人身體內に生理的現象の起るのも心理的理象の起るのも・すべて震原子が體內に運動するがために起るもので・震原子が肉身から一旦離脫すれば其の瞬間に於て生理的現象も心理的現象も悉く一齊に休止すること恰も電流が中絕して火の消ゆるが如きものなのである・故に曰く心は現象で實體あるに非ずと

〔二〕今世後世の夢想觀

天國を夢想するクリスチアン乃至淨土を欣求する孱弱(カヨワ)き婦女子にありては・死後自分が・どこ

か遠い所へでも往くものの如くに思ふてゐる様だが吾々は是れをお念佛主義者と名づけ又アアメン主義者と名づけ・其の情が惘然にたえられぬのである・上海事變の當時・廣島市に起つた井上中尉夫人の自害事件の如きは其の惘然たる事件の最も新らしい一例である・蓋し其の事件の由來といふは個様である曰く井上中尉は事變のため上海に向つて出征したのである・お嫁に來たばかりの夫人は自害して中尉を激勵したのであるが・其れが抑も念佛往生主義に迷惑した結果なのである・彼の女は遺書をかいて自害した其の遺書中に左の如き文句がかいてあつた曰く

この世は・短いものですが
未來は永く・とこしえに
續くものとぞ・聞きまする
いづれあなたも・あの世へと
お越し遊ばす・嘗じやもの
幾とせ後(アト)に・なりますか
蓮(ハス)のうてなの・その上で
お待いたして・居りまする(云云)

どうです??短氣といへば洵に短氣でありませう・剛毅な氣象に缺けてゐたといへば・たしかに缺けてゐたでありませう・いづれにしても此の如き觀念や思想は・たしかに念佛主義・阿彌陀主義の惡感化に災ひされたもので・理知の足りない愚夫愚婦にとりては洵に氣の毒な次第ではありませんか??

抑も佛教信者やキリスト信者などの三世觀は大概こんな程度のものであり・そして其の靈魂不滅觀の如きも亦大概此の程度を越えないのでありますが・實際は・あの世も・この世も・別に有るのでは・ありません・詳說すれば吾々が現在・知り覺えてゐる所の・此の娑婆・卽ち此の現見の大宇宙間・卽ち日光の照臨する範圍・星宿の存在する範圍・此の範圍が千年と言はず萬年と言はず・永遠無窮に存在するもので・吾々凡夫は此の範圍內に於て生滅を無數に繰りかへしてゐるので・實際は過去もなく現在もなく又從つて未來もないのであります・言ひかゆれば吾々の震原子は・賽の河原の石の塔の如く・積みあげては崩(クズ)し・又積みあげては崩してゐるのであります・尙ほ詳言すれば剛堂恩田重信なるものは一個獨立の震原子で・たまたま父の生殖器內に寄生し・此處(ココ)で有機質と無機質とを寄せ集め・顯微鏡で鏡見し得る程度の大きさの精蟲となり・緣ありて母の子宮內に移轉し・母の製造した卵細胞內に宿を定め・此處で又又有機質と無機質とを寄せ集め段々に四肢五體を建築して所謂エムブリオ卽ち胎兒となり・約十箇月にして完成し・母體を謝し此の娑婆へ匐(ハ)へ出て・呱呱の聲を發し・以て父母の恩を始めて感謝した・それが人生の始めなのであり・そして自ら勞苦に從事し・額(ヒタ)いの汗を以て國土と衆生との恩に報ひ・そして次ぎの肉體を造るため・今の此の肉體から離脫する・是れが浮世で死去と稱

る事件であり・そして再び緣を求めて肉體を造るまでの間・佛者は之れを中有(チウ・ウ)と稱するが今から言へば來世なのである・吾々は個樣なことを無限に繰りかへしてゐるのであり・そして其の緣を求むる所の欲求を佛者は無明の煩惱と稱してゐるのである・思へば餘義ない運命を持つてゐる樣だが・然し此の運命を巧妙に利用すれば・そこに又意外な面白いことも・おかしなこともあるのである・が・下手に運命を利用すれば・そこに又意外な苦勞や苦痛を體驗せねばならぬのである・蓋し運命を上手に利用する方法手段を知り覺えることが稽古であり・覺えさせることが教育なのである

所で下手な教育を受けたり或は理窟に合はぬお說教を聽くと・時に或は松井須磨子の樣に首を縊(クク)ることもあり・時に或は井上中尉夫人の樣に毒藥自殺をなすこともある・であるから・宗教も教育も餘程・其の道を撰擇せねばならぬのである

要するに恩田重信の震原子が其の中有から父の生殖器に寄生した時までを過去といひ・父の生殖器に寄生した時から・肉體を離脫する時までを現世といひ今生(コンジャウ)といひ・そして現世から望んで次の中有の時代を來世といひ後生(ゴシャウ)といふのであり・總じて之れを三世といふのであるが・此の區別は人間の小さな知慧の分別の上にのみ成立するもので悠久な宇宙の上から見れば黃粱の一炊に過ぎぬのである・從つて「蜉蝣の壽命も短かしと言ふべからず彭祖の壽命も長しと言ふべからず」である「あの世だ」「この世だ」なんて區別は實は夢中の判斷に過ぎぬのである・吾々は諸君の來世を明日の旅(タビ)と心得て今日の景色を愉快に眺めてゐるのである

所で悟れない人はお氣の毒ながら・今日の旅に疲れて・平穩な夢さへ結び得ぬのである・南無妙法蓮華經・アアメン

〔三〕人畜の區別

我輩の管理してゐる學校に現役の陸軍將校が配屬されてゐるので其の將校を通じて戰術とか戰略とか乃至軍人精神なんてことに就て色々と說明を聽取することが出來・愉快に且つ有がたく思つてゐるが要するに戰爭は命がけの仕事といふべきである・不惜身命の仕事であるに相違ない・此の點は日蓮が命がけで法華經弘通のため戰つたのと同じことである・思ふに何事でも命がけで取かからねば駄目なものである・寒い風に當つたら・健康がどうの・茄子や大根では榮養がどうの・なんてことに氣をかけてゐる樣な人間には成功の光は見えない・況んや戰捷の月桂冠やゴルデン・カイトの勳章に於ておや

抑も生物の壽命といふものは自害せざる限り宿命的に限定されてゐるもので其の定命(デヤウミョウ)は人間の力や藥劑の力や乃至神(カミ)佛(ホトケ)の力なんかで左右することは出來ぬものである・例へば Baseball の投げられた球子か・加農から打出された砲丸の如きもので・途中では方向が變化するものでなく・結局は行く所まで行くべき筈なものである

從つて兵士が戰場に出るも・出ないも亦宿命的に定つたものであり・其の上・戰場に出て彈丸(タマ)に中(アタ)るも中らぬも・宿命的に定つたものであり・のみならず・其れがため死ぬも死なぬも・不具になるも・ならぬも・すべて宿命的に定つたものである・であるから・怪我をしても・不具になつても・それは自分自身に固有した運命の發動と心得べく・從つて天を恨み人を恨むる道理はないのである

所で世の中には色々な迷信がある・他人の家の火鉢にかけてある鐵瓶の蓋を人知れず取つて懷中にし・そして富籤の場に臨めば必ず當籤する・なんてことを信ずるが如きが其れである・それと同じく千本針を肌につけておけば玉が除(ヨ)けらるると信ずるが如きも亦其れである・要するに・彈丸(タマ)に當りはせぬか・當りはせぬかと・心配し心勞する・左樣な人が宗教心の無い人といふのであります・個樣な人は大概・裏ぎられて落膽するものであります・成るべくは・そんな心配や心勞を・せぬが勝ちと吾輩は信じてゐる

然し人間ばかりぢやない・生物はすべて時時刻刻・其の日其の日・爲すべき仕事を持つてゐるから・其の仕事は必ず爲さねばならぬものなのである・見玉へ彼の雀を・彼は夜の明くると同時に食物を搜すべく出かけ・日が暮るれば歸り來りて眠りに就くではないか?? 卽ち彼は其の日・其の日の事業に親んで餘念なきにあらずや・ぢやないか??

人も亦其の運命は鳶(トンビ)や烏(カラス)と同じことであるから・其の日・其の日の仕事を修めねばならぬのである・然らざれば必ず衣食に事缺(コトカ)きて・飢餓に迫り祁寒に凍死せねばならぬことになるが・去りとて飽食煖衣で滿足してゐては一種の畜生で人とは言はれぬことになるのである

夫れ人と畜生と・どこに區別があるか?? 畜生も食物に依つて生活してゐる・人間も亦食物に依て生活してゐる・此の點・人畜に於て同じからずやぢやないか?? 畜生も種族繁榮のために苦勞する・人間も亦子孫繁榮のために苦勞する・此の點も亦人畜に於て同じからずやぢやないか?? 畜生も雌雄互に相愛し人間も亦男女互に相愛す・卽ち此の點も亦人畜に於て相異して居らぬぢやないか??

然るに畜類世界には・所謂る教育なるものがなくて・人間にのみ教育の必要なる理由は・どこに存するか蓋し人をして畜類の境域を脫せしめ・高級な位置に進ましめ文質彬彬の君子人たらしめんがために外ならぬのである・聖人孔子は「犬馬も皆よく養ふが・敬ふことを知らねば・人間も畜生と相異は無からうぢやないか」と申しておかれたのであるから・人畜の區別論は三千年の昔しから着眼された事柄であるが・不思議な事は文明の世界と言はれてゐる今日・此の人畜區別が餘り多く論議されない事であるのである

見よ!! 犬猫を・彼れ畜類は其の賴つて生長した所以を知らぬではないか?? 又見よ!! 犬猫を・彼れ畜類は親子兄弟姉妹・互に相ひ姦(オカ)すではないか?? 又見よ!! 犬猫を・彼れ畜類は父母師長を敬せざるにあらずや否・親をも全然忘れてゐるではないか?? 又見よ!! 犬猫を・彼れ畜類は同胞同類の疾病苦難を見て

是れに同情することを知つて居らぬではないか??

今ここに人ありて・此の人が

(一)陰部を露出して耻づる所なしとせんか・此の人は恐らくは畜生なるべし

(二)獨立するに至りて其の親を憶はず顧(カヘリミ)ざらんか・此の人は恐らくは畜生なるべし

(三)師弟長幼・雜居して然も相ひ敬することを知らず又相ひ愛することを知らざらんか・此の人は恐らくは畜生なるべし

(四)同胞の疾病乃至災難痛苦を見て平然たり無感情たらんか・此の人は恐らくは畜生なるべし

(五)而して唯其の飲食物に就てのみ相ひ爭ひ・そして少しも謙讓することを知らずとせんか・此の人は・たしかに畜生なるべし

學問といひ・教育といふものは・己れを立派な人にし又他人を立派な人にする所以のもので・それには先づ第一に人畜の相異の點を或は知り或は覺えさせ然る後に生活の道を或は知り或は覺えさせねばならぬのである

蓋し五倫五常の道を知り覺えて・親に對しても兄弟姉妹に對しても乃至全世界の同胞に對しても・皆一樣に報恩感謝の誠意を捧げ・これがためには身命を損しても惜しまぬ氣慨を堅持するに至つて・其の人は始めて眞實立派な人たり得るのである・剛堂の歌に曰く

難(カタ)くとも・人たる道を・つくしなば
此の世に生きし・甲斐やあるらん

人にして此の氣慨あり・以て此の一世を送らば永代には善人たり君子たるを得べく・或は孔子たり釋迦たり・エスキリストとなりて再び此の苦海に生れ來らざるべし

吾々は此の如き信念を民衆に持たしむのが本統の教育であり・そして本統の宗教であると信じて居り・そしてゴットや阿彌陀を信仰させる事は百害あつて一利なきが故・所謂既成宗教は・どうしても撲滅せんければ・ならぬと思ふてゐるのである

〔四〕遺骸片付方法

然らば此の臭皮袋・製糞器は震原子離脱の後・之れを如何に處置すべきか??(一)或る人は曰く燒いて粉末となし・汽車の窓から飛散せしむべしと(二)或る人は曰く燒いて粉末となし・駿河灣に投棄すべし(内田魯庵著バクダンを見よ)と(三)或る人は曰く一年有半の著者中江兆民の遺言の如く・死んだ知らせもなさず葬式の式禮をもなさず・無雜作に墓地の壙中に納むべしと(四)或る人は曰く男爵山川健次郎先生のときの如く・遺骨を寺の佛前に安置し・其の前に香爐と抹香とのみを供へ・血族も友人も・尙ほ價侶も居らずに時間を定めて告別を受け・其のまま墓穴に納むべしと(五)或る人は曰く歐洲大戰爭の

とき獨逸軍が戰友の死體を熱湯中に煮て・そこに析出し來る油脂を採集し殘れる骸骨を墓地に埋葬し紀念標を建つべしと・是れは地獄の沙汰なるべし(六)或る人は曰く遺體は燒却し其の遺骨は粉末となし單純に土中に埋むるは益なし須らく强硫酸もて之を處理し過燐酸石灰肥料となして農作の用に充つべしと

蓋し是等の意見や處置は夫れ相應の理由より生れ出でたることならんも・すべて人情にはづれたことで決して採用すべきものではないと思ふ・然らば從前通り(一)團扇大鼓を叩きながら陽氣に賑やかに野邊送りすべきか(二)或は遺骸を佛壇の前に安置し其の前で經文を讀みながら銅鑼・鐃鈸をドンガラン・ドンガランと鳴らしつつ來會者の燒香を求めて・然る後土中に深く埋納すべきか(三)或は花環を一丁も二丁もつづけて祭場に練り込み・そして其處(ソコ)で無數の弔辭の朗讀を受け・然る後・燒いて骨となし墓地に埋納すべきか??是れ等!・多種多樣の葬禮や葬式は古來の習俗なれども今日となりては一種の弊風で宜しく改良すべきものと言ふべきである・然らば・どう片付くべきか??それが問題であるが此の問題は「禮」を標準として考慮すれば容易に解決し得らるるのである曰く

抑も禮といふものは文明の基準で之れに準據すれば文となり之れに據らざれば野となるのである蓋し「禮は敬のみ」と孝經にもかいてある通り・人の心の裡に一點的敬愛の念あれば・そこに必ず和順な擧動と處作とが現はれ出づるもので・斯の場合の擧動・動作が則ち禮に合(カナ)う處のもので其の禮儀は古人も既に三千種以上も列擧した程のもので・これが鉛(ナマリ)これが銅(アカガネ)と指して示し得る樣に禮儀は一一指して示めし得ぬから・言はば禮儀といふものには定(キマ)つた寸法や度量が無いと言ひ得るのである・從つて葬禮や婚禮の儀式の程度にも亦高下(カウ・ゲ)幾等の差も有る次第だが古人は已に

節儀の多からず少なからず・過不及なく恰好の地位にある・これを禮といふ

と言ふておいたのであるから・禮は恰好・卽ち程(ホド)の宜しいこと・適宜なことと思へば・それで宜しいのである・例令へば夜光の璧は之れを錦襴や緞子(ドンス)に包んで貯藏しておいても善いが・之れに反し・武州玉川の青石や紀州那智の黑石などを大事大切に桐の箱へでも入れて保存して見玉へ・恐らくは世間が此の人を指して氣違ひか・阿呆といふであらう・これと同じ理窟で例令へば小使が印半纏に股引で箒を手にし校庭に立てゐても決しておかしくはないが・若し教壇に立つべきプロフエッサアが褞袍(ドテラ)や兵兒帶で卒業式場に出席したら・それは極めておかしなもので・是れをも又世人は指して「彼は精神に異常を來してゐるであらう」と言ふであらう・蓋し小使の股引と印半纏とは其の身分に相應したもので・それが小使の禮服といふべく・プロフエッサアの燕尾服とシルクハットをも亦教授に相應したもので教授の禮服といふべく・そして褞袍(ドテラ)や兵兒帶はプロフエッサアの着るべきものでないのである

此の如く禮儀といひ禮式といふ・其の寸法や度量は一定したものでないから單に婚禮は此の如くせよ・葬式は此の如くせんければならぬといふて・其の程度や基準は之れを示めし得ざるものであるが・若し眞面目(マシメ)な人で心に一點的敬愛の念を抱いてゐるときは其の擧動や處作に於て氣違ひじみた事が決して現はれて來(コ)ぬのであるから古書にも「禮は人を作り・事を成すの儀節なり」とかいてあつたのである

そこで人間には・赤子(アカゴ)や白癡(バカ)を除いて其の他のものには必ず

不忍人之心(孟子公孫丑上篇)

といふものが存してゐる・から・人間の言語動作は必ず此の「忍びざるの心」に據つて取捌ひてゆかねばならぬのである・卽ち此の心のあるものなら親(ヲヤ)兄弟・妻子・朋友の死んだのを見て心を痛めない筈はなかるべく・又畜類の如く陰部を露出して耻ぢざる事もなかるべく・有德な君子と暴戾な惡漢との見さかいのつかぬ筈もなかるべく・從つて是非善惡の分別のつかぬ筈もなかるべし・卽ち此の忍びざるの心から・すべての事を割り出せば・敎えられなくとも必ず禮儀といふ事も節儀といふ事も自(オノ)づから判る筈である

そこで例令へば父親(オヤヂ)が死んだとして其の遺骸を如何に處理するかといふ問題に逢着したりとせんか?? 此の遺骸は震原子の離脫し去りたる拔殼(ヌケガラ)で牛馬の死骸と何等の相異は無いものと見て・之れを畑(ハタケ)の隅に無雜作に埋めるとせんか?? 忍びざるの心ある者にして果して此の如き行爲が爲し得らるるものであらうか?? 吾々は斷じて左樣な無作法は爲し得られぬと信じてゐるのである・是れ葬式といふ一種の禮儀の起りたる所以である

であるから葬式 Die funerale Feierlichkeit といふことは人間界には・どうしても無くてならぬ事であり・必ず有るべき筈の事であると思ふのであり・そして若しも唯物論に左右されて葬式や葬禮をつまらぬ事と見なして全廢し死骸を燒いて・其の瓦斯を燈火用に供し殘骨を粉末にし酒で呑めばカルシウム療法の一助になる・なんて事を言ひふらし或は過燐酸石灰にして肥料に供給する方が國益になる・なんて事を言ひふらす人ありとすれば其の人は決して本當な人間では無いと斷言すべきである・であるから幾ら科學知識に富んだ人でも・此の點だけは熟考せんければならぬのである

然らば葬式や葬禮は・どうすれば宜しいかといふに・其れは其の遺骸に對し敬慕の念を十分に發揮すれば・それで宜しいのであるが・其の際・わけの判らぬ阿彌陀經や觀音經などを讀むことや千手陀羅尼の樣なものを唱ふることなどは全廢し遺骸や遺骨や位牌に對し最敬禮を捧げれば・それで宜しいのであり・そして常に在天の父や母・又は兄弟姉妹乃至先生や友人の在天の震原子を憶念して敬慕の赤誠を發揮すればそれで宜しいのである・目的物としては明鏡か御幣を安置し或は其の側(ソバ)に寫眞像(肖像畫)などを置いて其の前に跪坐し合掌(拍手)禮拜すれば・それで宜しいのである・が・其のための神壇の

裝飾なんかは必ず身分や身代に相應した程度を越えぬ樣に注意せんければならぬのである・遠國に在りて遙拜する場合にも・敬慕の赤誠を發揮するだけにし・若し友人知己等を集めて遙拜する場合には・其の拜すべき人の歷史を讀み上げ若しくは分配するだけに止めておくべし

抑も祖先に對する此の敬禮式は所謂る我が國の祭(マツリ)といふもので皇靈祭などの祭と同じ文字なのであるから・先祖の法事・法要なんて言葉をば全廢して・其の代りに亡父の震原子を祭るときには考祭の文字を用ゐ亡母の震原子を祭るときには妣祭の文字を用ゐる父母の震原子を併せて祭るときには考妣祭の文字を用ゐ其の他の祭りには或は亡妻の祭・亡友の祭・先師の祭等の文字を用ゐるのであるが又祀(マツリ)の字を用ふることもあるが・とにもかくにも祭祀(サイシ)といふことは人間社會の恒禮で此の禮が無いとすれば其の社會は動物社會で畜生の群居と言ふべきなのである・但し假設(タト)へ先人の震原子を祀るとするも・神田明神の御祭禮の樣な氣違ひじみた騷ぎは先人の威德を淫(ケガ)す所以であるから・愼んで避けなければならぬ

〔五〕葬式と祭禮

然らば葬式や祭禮はどうしたら宜しいかと言ふに・それは今日行はれてゐる樣な佛式やクリスチヤン式ではいけない・葬式を行ふとすれば・先づ神式が一番宜しいが此の神式でも現代の神式は段段に常軌から脫線して下らぬ形式に墮落して來たから其のまゝに・神式がよいとは云はれぬが・先づ先づ神式が宜しいといふべきなのである

然らば神式はどうするが宜しいかといふに・それは蓋し靖國神社で執り行はせらるる御祭禮の禮式を最高標準として夫れに準據し身分相應・身代相應に執り行へばそれで宜しいのであるが・瞑目合掌して

山のたなつもの・はたのひろものさもの・くさぐさのうまき・うつくしきもの・心つくして捧げ供へまゐらせて・神安すかれと禱りに禱り奉るになん

などと申し奉りて・茄子や大根・胡瓜や大角豆(ササゲ)なんて下らぬものを供へたり或は鯛や鰨(スルメ)鰯に鰤(ゴマメ)昆布に裙帶菜(ワカメ)こんなものを山と積みかさね・供へて以て禮を盡したりと思ふ樣な心得は甚だ宜しくない心得で・少し考へて見れば馬鹿氣た事であることが直ぐ合點される筈である・卽ち考ひて見玉へ・此の臭皮袋を惜しげもなく見棄てて・所謂る靈界に歸幽された震原子に・自分の俗惡な食慾や飮慾などから割り出した品物(シナモノ)を・うまき・うつくしきもの・などと揚言しつつ供へて見たところで其れがどうなると思ふのか・料簡が判らんぢやないか?? 俗人の俗慾から割り出したものを苟も神靈と敬慕し奉る所の震原子に手向けるは・實は無禮至極の行爲といふべきである・淸き酒と潔き榊とを供へれば・其れで宜しいのである・況んや冥途の闇(ヤミ)を照すためだと稱し・白晝に燭蠟を點(トボ)し松明(タイマツ)を焚(タ)き・提灯をぶらさげ・藁草履を穿(ハ)いて靈柩の供(トモ)

にたつが如き・佛式葬儀の如きは實際馬鹿氣た事ではないか??否・氣違ひじみた話しと言ふべきぢやないか??況んや泣男や泣女を雇つて・自分の愁歎的愛情感を代理的に發表するが如き支那人的葬式に至りては沙汰の限りといふべきぢやないか??考へて見玉へ!!現在行はれてゐる葬式の俗習を・正氣ではとても爲し得られない所作（ショサ）ではないか??今日にして改めずんば何の日にか改め得んやぢやないか??生活改善なんてことは・幾年も以前から唱道されてゐるが・少しも改善された所は無いのみならず・葬式や婚禮の様子は惡るくなるとも善くなつた所は少しもないぢやないか??

蓋し葬式の改善案は決して難（ムツカ）しい事ぢやない・從來行はれてゐる神式に少し改善を加ふれば其れでよいのである卽ち兩親の或る一人が死んだとせんに・其の場合には先づ屍（カバネ）を棺に納め身代が裕福ならば槨（ソトクワン）を備へて二重棺となし・それに白色金巾の帔（オヒ）をかぶせ或は資力あらば白色羽二重か白色綸子を白色金巾に代用してもよろしい・そして其の棺槨を白木の案（ダイ）に安置し其の前に白木の机案（ツクエ）を排置し・其の左右に榊の紙四手（カミシデ）か又は白麻（ユフ）つけたる榊臺を置けば・其れにて事足るべし（詳細の事を知りたいと思ふ人は明治六年・敎部中錄・常世長胤氏撰に係る上等葬祭圖式を看るべし）

別を告ぐるものは其の机案の前に到り紙四手（カミシデ）つけた榊の小枝卽ち玉串（テマグシ）を供へ脊骨を前方に傾け頭首を前に垂れ・拜禮して以て敬慕の情を表現し罷（マカ）り退（サガ）れば其れで告別の禮式は濟むのである・此の場合に參拜者の或る人は遺族に代つて頌辭（新語）卽ちシヌビゴト卽ち漢語の誄（ルヰ）を捧讀し・長逝した人の生前の人格品性乃至名譽功績德行等を稱揚し累述しても・よろしいが・其れは程度問題で著者恩田重信の如き平平凡凡・惡るい處は有つても善い處の無い人間に對しては頌辭や誄詞（ルヰシ）の述べ様が無いから其の場合には此の世を棄て飛び去つた神靈卽ち身靈（ミタマ）卽ち震原子の永く多幸ならんことを禱るだけに止めておくより外に仕方はないが・去ればとて再び逢ひ難い人に對する感情だけは十二分に表示して別れを告げなくてはならぬのである最近滿洲事變の一周年に際し靖國神社で戰死者の慰靈祭が行はれたが・其の祭場の様子と荒木陸相の參拜の様子とが撮影されて新聞紙上に掲げら

靖國神社に於る滿洲事件一周年陣歿者慰靈祭　荒木陸相の參拜

れて吾々の目に入りたる故・其の寫眞圖を右に轉載したから・葬式改善に意志ある人は是れに準據して改善せらるるが宜しいと思ふ・尙ほ同日卽ち昭和七年九月の十八日に奉天府で執行された慰靈祭の模樣の報道にも

武藤軍司令官・小磯參謀長以下・關東軍幕僚は心からなる玉串の榊を捧げ死して護國の鬼と化した勇士の冥福を祈つた

とかいてあつた・蓋し死者に對する感情の發表は是れだけで完全である・銅鑼や鐃鈸を叩き鳴らし・そして下らぬ阿彌陀經や觀音經などを小唄（コウタ）もどきに節（フシ）などつけて讀み上げるのは阿呆の骨頂と言はねばならぬのである

〔六〕結　論

上下三千年間に成立した宗教の數は大小併せて約七十有餘種に及んでゐるが其の最大なものは・なんといふても佛教・基督教・マホメット教・印度教等であるが・其の不思議なことは・いづれの宗教でも神とか神に類したものを基礎に置いてゐることである・基督教のゴットや佛教の佛樣や如來樣は言ふまでもない・彼の天理教でも大本教でも・殘らず神樣らしいものを設定しておくではないか?? 是れは抑も如何なる理由に依るのであるか?? 蓋し人間が其の身にふり掛つた不幸や災難などから離脱せんと考ひ・或は天地間に起れる不思議な現象に驚きて救ひを求め助けを乞はんとして・さては悧巧な人間が想像的に考い出した神とか佛とかいふ威神力の持主を信ずる樣になつたものであらう・言ひかゆれば人間の無知に原因して起つたものであるから既成宗教には・どうしても神や佛がつきものになつてゐる・所で近頃急に發達した「人の道」といふ宗教類似の教團などでは在來の神樣や佛樣を採用せず・理合的に修身學を教え込むので理知に富んだ人間が群衆するのであることは事實を見て知ることが出來るのである

であるから科學的知識の發達するに從ひ段々に神佛の觀念が薄くなり遂に「宗教は阿片なり」などと言はれて・露西亞のあれ程隆盛であつたお寺が今日では殘らず學校や兵營や製造場になつたのである・我が日本國でも明治の初めには排佛毀釋の聲が頻りに揚げられたのであるが其の後に生れて來たものが科學的知識に乏しかりしため基督教などに感（カブ）れるものが現はれ・同時に對抗して佛教が又擡頭し・今日に及んだのであるが・兎にかく理知が進めばゴットや佛は必ず影をかくす樣になる筈である所で是れから世界は少佐小林政助氏の提唱された如く「東洋の人口と西洋の人口との調和」を目的とし又「東洋の人種と西洋の人種との融合」を目的として進まねばならぬ・假令ひ政治的には世界の或る部分を・此處（ココ）は亞米利加國として染め別け此處は日本帝國として染め別け乃至此處は滿洲國として染め別けるとも・其の國內に居住する人間はいづれの國籍にあるものでも均等な取扱ひを受け得る

様にせんければならず又どこの國籍にあるものでも隨意に入國も出來・退去も出來得る様に・總てのことを均等ならしめ・決して人間の皮膚の色や光彩膜の色や言語の相異に基づく差別的取扱ひを絶對に爲さぬ様にすべく・其の實現に向つて進まねばならぬ・從つて民族的衝突なんてことも絶對に起らぬ様にし從つて又支那人排斥・日本人排斥なんて無禮無作法な言論行爲が絶對に起らぬ様に・努力し共存共榮を目的とし百年の後には全世界が平和な一家庭となる如く進めてゆかねばならぬ筈である是れを世界平和主義と稱するのである

此の如き世界平和の大理想を目的として進まんとする場合にも亦鬪爭や嫉視反目の誘因と成り易き・然も人知の科學的に發達した二十世紀の社會に最も不合理な神や佛を基礎思想とする既成宗教は是非とも之れを撲滅せんければならぬのである・否・否・此のまま海外布教なんて事を利用して或は佛教で進み或は耶蘇教で進み乃至天理教や猶太教で進んだならば一時は或は治まつてゆくかも知れぬが・いつかは血を見るが如き大修羅場を現出させるに定(キマ)つてゐる・かるが故に此の意味からも亦既成宗教は是非とも之れを撲滅せんければならぬのである（畢）

既成宗教撲滅論

附錄

既成宗教撲滅論　附　錄

左記附錄の一篇は東京商科大學名譽教授商學博士 **下野直太郎** 君の所說であります同君は昭和十年十一月下旬から「日本國及日本人・我國洋學の弊」と題した論文を大日本新聞に掲げて居られますが十二月十日に掲げられたものの中には私の平素抱懷して居つた考ひに證明を與えて下された樣な意味が存して居りましたのでそれを其のまま轉載致したものであります・本書は此の十日に印刷製本が出來上がりましたので・茲に附錄と致したのであります・博士の御所說により私の所信が確實となりましたことを喜び・紙上から博士に敬意を捧げます　恩田重信

英相グラットストンは嘗て宗教と政治（チャーチ・アンド・ステート）の區別と關係を論述せり・然るに宗教と科學の關係は更に一層の重要問題なるが如し・化學出でて萬物の成分を研究し物質不滅を證明し更に物理學によりて動の法則及勢力無盡を說明し古來神秘不可思議とせられたる幾多の自然現象も科學的理由によりて闡明せられ・果ては神佛の存在をも否定し・宗教の根底を顚覆せんず形勢なりしが物質勢力に次ぎ靈魂を研究せんとして成らず茲に化學の一頓挫を來し退却するに及び・キリスト教は再び其の頭を擧げ爾來徐々に其の勢力を挽回しつつあるものの如し・殊に又物質慾に起源せる過般の世界戰爭に於て・此世からなる修羅地獄を演じた事に懲り・神信心復興し・ローマ法王に縋り・神佛に懺

悔を捧ぐるもの著るしく增加したりと聞く・然るに我國に於ては如何・古來幾多の宗教あれども閑却せられ今や宗教とは名のみ殘存し其の實質は消滅し・只葬禮式にのみ入用にして日常生活には沒交渉なるが如く然り・其の教義に至りては僧侶仲間にすら理解されざるものあり・況や俗人に於てをや・人は宗教的動物なりと謂ふ・宗教なければ牛馬と何ぞ選ばん・極端なる自由論は彼の所謂自然主義者なるものを生ぜり・之れ畜生道なり

大凡そ吾人の行動には思言行の三あり・言行は法律の支配する處なれども・思想は法律の力の及ばざる所にして而も言行の根源なり・其の源にして清からざれば其の末の濁れるは當然なり・而して其の根元たる心の修養は之を宗教道德の力に俟つの外あるべからず・宗教の目的は靈魂の淨化にありて日常實生活の根底に觸るるものなり

宇宙の三要素は第一に物質・第二に勢力・第三に靈魂なり而して物質は不滅なり靈魂獨り不滅ならざるなきを得んや

聞說天地の間・暗黑にして空虛なり・唯獨り神靈のみ存在し・森羅萬象・神意によりて創造せられたりと・果して然らば萬物は畢竟靈魂一元なることなきを知らんや

夫れ生とは靈魂と肉體との結合にして・死とは其の離散なり・肉體は土地より出でて土地に還り・靈魂は天より來りて天に歸る・物質靈魂共に不滅にして其の離合常なく・生死の現象は連續的間斷なく繰返さるるなり・故に所謂後生なるものあり・後生の榮を希ふものは今生に於いて德を積まざるべからず・今生を只の一生と心得・一身の利慾にのみ沒頭して他を顧みず・殘酷を敢てし蓄積したる富を殘して死し去り・徒らに子孫を墮落せしむるものは來世に於て不幸の人と生れ・或は更に牛馬犬猫に生れ來ることなきを保すべからず・何となれば生物の靈は人獸鳥魚蟲類及植物にも共通なればなり

靈の存在は絕對的永久なれども肉眼には觸れず・物質との結合によりて其の存在を發揮す・吾人の體內に宿れる精神は神にして肉體は社殿なり・社殿にして朽れば神は去るなり・故に常に社殿の掃除修繕を怠らず・神靈をして居心地好くせしむるを要す

神は無限にして能力を有す・無限大は之を如何程・細分するも無限大なり故に各人皆萬能の神にして創造と盡滅との外は何事も爲し得ざることなし・只努力に俟つべきのみ・吾を神なりと知れば自重せざるべからず・又人も神なりと思へば輕侮すべからず・自他相尊重するは禮讓の基なり

吾人には肉眼の外に心眼なるものあれども・無學の徒は之を備へざるが故に肉眼に見へざる事物は動もすれば之を否定し・肉體慾にのみ沒頭するを例とす・故に我子孫のみを子孫と心得て之を偏愛し他を顧みざるもの多し・然るに子孫の肉體は親の血を分けたるものなれども・其の靈魂は親の生存する間は・親の靈魂にあらずして他人の死亡により遊離したるものの偶ま我子の肉體に宿り來りたるに過ぎず・故に其の容貌に於ては親に似たる子多けれども・其の根性に於ては・子の未だ生れざる以前に死亡

したる祖父母又は赤の他人に似たるもの少なからず・されば我子に財産を讓るは・其の實は他人に讓るものなきを知らんや・又己れ一人の働きによつて獲得したる財産なりと思ふは間違ひなり(畢)

(一)迷信は畏怖の子・弱行の子・無知の子である

Der Aberglaube ist ein Kind der Furcht, der Schwachheit und der Unwissenheit (Friedr. d. Grosse)

(二)迷信は正しき信心を放棄せし處に發生す

Wuchern wird der Aberglaube, wo man weg den Glauben warf. (Friedr. Rückert)

(三)正しき信心に進むべき門戸の拒否されたとき・迷信が窓牖に昇り來り・若しそれを逐ひ出せば幽靈が現はれ來る

Glaube, dem die Tür versagt, steigt als Aberglaube ins Fenster; wenn die Götter ihr verjagt, kommen die Gespenster (Emanuel Geibel.)

昭和十年十二月廿日印刷
昭和十年十二月廿五日發行
東京市麹町區麹町四丁目三番地三
編輯兼發行人　恩田重信
東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷人　濱野英太郎
東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷所　東京印刷株式會社
麹町出張所

終